

2026年(令和8年)3月10日

## 『東京大空襲：焰の中を逃げ廻った体験談』

土師野(ハシノ)良明

下記は、未だ作成途中のものです。

<東京大空襲の概要>

今から約80年前、日本はアメリカ(U S A)と戦争をしていた。これを「太平洋戦争」という。

80年前の1945年(昭和20年)8月に日本は敗戦したのだが、その約半年前の3月10日の午前零時頃から約2時間半、米空軍のB29爆撃機約280機が、東京下町を空爆した。

まず東京下町の本所、深川、西浅草、日本橋の4地点に大型焼夷弾を投下し、その焰を目印に、4地点の内部の人口密集地域に、1,600トンもの焼夷弾を投下し、東京の下町は灰燼に帰した。

(1) 当時、国民学校3年生。父がその1月に空爆で死亡したので、疎開先から西浅草の自宅に戻っていて、この空爆に遭遇した。家族5人は焰の中を逃げ廻り、全員火傷したが生き延びることが出来た。

(2) この空爆の被害 --- ① 直下地域は約15平方km(4km×3.5km?)。主に現在の台東区、墨田区、江東区で、居住者約60万人のうち死者・行方不明が約12万人、負傷者は推定最大40万人(死傷率8割)ともいわれるがその実数は不明である。② ①以外の類焼地域は約25平方km。主に荒川区、中央区、千代田区の一部で、人口は約40万人。類焼なので、この地域の住民の死傷者は幸い少なかった。③ この僅か2時間半の爆撃により、東京の下町約40平方km(6km×6.5km?)が灰燼に帰し、死者を含めて約100万人の住民が被害を受けた。

(注)この焼失地域及び被害者数は、1923年の関東大震災の被害と概ね重なる。

(3) 東京大空襲の被害は、原爆被害に較べ極めて認知度が低い。その理由は、戦時中は日本政府が箝口令を敷き、戦後は占領軍(米軍)もその悲惨さを秘匿したためである。

(4) 『東京大空襲』という場合、特にこの3月10日の空爆を指すが、その後、東京だけで同規模の大空襲は4回、小規模のものを含めると約120回あった。その後、空爆は全国に及び、原爆投下で敗戦を受け入れた8月迄の僅か半年で150以上の大小の地方市街地が灰燼に帰した。

(5) この日本空爆を計画し指揮したのが米航空軍のカーチス・ルメイで、彼はベトナム戦争の北爆も指揮した。なんと、このルメイに対して、戦後、佐藤内閣は、航空自衛隊の創設に貢献したとして「勲一等旭日大綬章」を授与した。その佐藤栄作もノーベル平和賞を受賞している。

(6) 世界史的な意味--- ①通常兵器を使用し ②10万人以上の非戦闘員(その約7割は女性と子供)を ③計画的に ③僅か2時間半で ④虐殺した「人類史上最大の無差別虐殺事件」である。

【別添】(A) 東京大空襲後の空中写真

① 手前の蔵前から右上の浅草寺を臨む。

② 中央が東本願寺、その左脇が私の自宅だったところ、右に隅田川を臨む。

③ 最初の爆撃投下地点とされた4地点の1つ、東本願寺及びその周辺。

(B) 逃げ回った道順の地図

(C) 投下された焼夷弾の構造図

<体験談のはじめに>

日本が「太平洋戦争」で敗れて降伏文書に調印したのは1945年(昭和20年)9月2日である。(8月15日は昭和天皇が敗戦宣言をした日)。今年はその「敗戦」から81年目になる。

ところで、敗戦の年の8月の大虐殺「広島・長崎の原爆」については、国内外でも広く知られているが、その約5ヶ月前の3月10日に、僅か2時間で東京の下町が灰燼に帰し約12万人が死亡し約100万人が家を失った「東京大空襲」という世界史的な大虐殺事件があったことを知る人は、国内でも非常に少なくなった。

前述のように、当時、私は9歳11ヶ月だったが、1ヶ月前の1月に、父(45歳)が西浅草の自宅近くで空爆のため被爆死したので、千葉の疎開先から、母(40歳)、弟(7歳)、妹(3歳)、妹(1歳)の5人と一緒に自宅に戻っていた。そして、あの空襲に遭遇し、空爆の猛火の中、火傷を負いながら、家族5人は逃げ廻ったのである。

その凄惨な体験の記憶はトラウマ(心の傷)になっていて思い出すのも辛いことだったので、これまで人に語るのは極力避けていた。ところが、ウクライナ戦争やイスラエルとハマスの戦闘(戦争)が起り、テレビなどで悲惨な状況を目にするようになると、あの80年前の「東京大空襲」の悲惨さが重なり合うのである。そのような中で、あの私の体験を語ることに意味があるのではないかと思うように気持ちに変化が起きてきた。

この体験談が、戦争を絶対に「起こさせない」<注:「起こさない」ではない(後述)>ためのヒントになればと願う。特に孫達の世代に聴いてもらえればうれしい。

## 【 体験談 】

< B29 爆撃機による日本本土空爆の開始と学童疎開 >

日本軍は、1941年(昭和16年)12月8日にハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、「太平洋戦争」が勃発した。その僅か半年後の1942年6月にはミッドウェイ海戦で大敗し、その後は負け戦が続き、2年後の1944年7月にはサイパン島が陥落し、東京がB29爆撃機の空爆範囲となった。

そのため、翌8月から「学童疎開」が始まった。この時、私達家族6人のうち、母、私、弟、2人の妹の家族5人は、千葉県京成電鉄大和田駅に近い農家に縁故疎開した。

父は、西浅草の一地域である当時は浅草区松葉町(現在は、台東区松が谷1丁目。合羽橋道具街と呼ばれる場所)にある自宅に残り、「みのや」という屋号の酒屋を営業していたが、当時、酒屋は味噌醤油等食料品の配給所を兼ねていた。父は町内会の役員等もしていた。(ちなみに、祖父も同じ場所で酒屋を営み、関東大震災に遭遇している。)

その年の11月から、B29爆撃機による本格的な東京空襲が始まったのである。

<空爆による父の死>

翌1945年(敗戦の年)になると、B29が毎日のように飛来し、東京を空爆するようになった。特に1月27日の昼間には、銀座、有楽町駅、浅草などが空爆され、この時の空爆で、父は自宅近くの防空壕で被弾し、爆弾の破片が内臓に達し瀕死の重傷を負った。

その報を受けて、翌28日、先ず母が下の妹を背負って東京に戻った。

翌 29 日の午後に、親類の人が私達残っていた 3 人を、「病院に連れて行く。」と言って呼びに来た。ところが行き先は病院では無く自宅だった。

すでに夜になっていた。何か異変が起きていることは感じていたが、自宅の玄関に子供 3 人が立つと、母が現われた。突然、母は『お父さんが死んじゃった！』と気が狂ったように大声で叫びながら私に抱きついてきた。母は私達が着くまでじっと耐えていたのだろうか、それから、唯々嗚咽するというかしゃくり上げるような声を出して泣き続けた。

父は、町内会の世話役で隣組の組長でもあった。私達(子供達)が着く 2 日前、1 月 27 日の昼間、警戒警報が鳴ったので、いつものように「防空壕に入れ！」とメガホンを口に当てて大声で近所を走り廻っていたという。いつもなら警戒警報が鳴ってから 20 分ほどして空襲警報が鳴り、それを合図に、外で監視していた父のような役目の成人男性は防空壕に入るのだが、この日は、空襲警報が鳴り出すと同時に空爆が始まったという。父は、我が家の前にある防空壕に向かって走っていたところ、50m 程のところ迄来て爆弾が近くに落ちたのである。父は爆風に飛ばされて傍の掘っただけの小さな壕(無蓋防空壕)に落ちた。その壕の中で気絶していたのを発見されたという。直ちに近くの三筋病院に担架で搬送されたが、爆弾の破片が手や脚だけでなく胃や腸を抉(えぐ)っていて、もう処置の施しようがないという状態だったという。父は、それから約 1 日半、麻酔が切れるともがき苦しんだという。翌 28 日の夜、母は、未だ生きている父に逢えた。母は「直ぐに子供達が来ますよ！」と何度も耳元で言いながら、夫である私の父の手を握り続けたという。父は 29 日の早朝に亡くなった。父の最後の言葉は「子供達に逢いたい---」だったということである。死亡後、直ちに集団火葬された。父の内臓から取り出された爆弾の破片が、仏壇の骨壺の横に置かれていた。それは 5 センチほどの焼けた鉄片で、錆びた鍬(やじり)のように思えた。骨壺の横に爆弾の破片が置かれたことは、大人達にとっては復讐を誓う儀式の役目を果たそうとしたようであるが、子供の私には異様な光景だった。

仏壇の前に茫然として立っていると、店を手伝っている近所の「お婆さん」(当時の平均寿命は 50 歳ぐらいで、50 代になるとお婆さんと呼ばれていた。確か山本さんと言ったと思う。)が、私の肩に両腕を置き、私をジット見つめ、『ヨシアキちゃん。お父さんの仇を必ず討つてすよ！分かるわね！』と諭すように語りかけた。これほど強い眼差しを私はその後も見たことがない。続けて『私の息子達の分も頼みますよ。』と言うと、私の母と抱き合っただけ泣き崩れた。私は、突然、何故か震えが止まらなくなった。この「お婆さん」のご子息 2 人は、既に 1 年ほど前に、20 代で中国戦線において相次いで戦死していたのである。

(戦争は一度始まって犠牲者が出ると怨念の連鎖で終わりが見えなくなるのは、このことをいうのであろう。「怨念」を「赦し」に変えるにはどうしたらよいのであろうか。)

<東京大空襲の開始>

父の死後、私達家族 5 名は西浅草の自宅に残り、母は近所のあの「お婆さん」と一緒に酒屋を続けていた。母は店を閉めて疎開したかったそうであるが、食品配給の仕事のこともあり、酒屋の権利を失うことにもなるので、迷っていたということである。

この年は異常な寒さが続き、父の死から約 1 ヶ月経った 3 月 4 日には雪が降った。

東京大空襲の前日、即ち3月9日の夜も寒く、その上、強風(秒速10m以上)だった。そして22時30分頃「警戒警報」が鳴り、私達はあのお婆さんや隣組の女性や乳飲み子や幼児と一緒に自宅前の「防空壕」(後述)に避難した。何れも隣組の常連達で、成人女性が数名、子供は乳飲み子を含めて十数名だった。お婆さんを除けば、それ以外の女性は乳飲み子を背負っていた。当時の下町は、子供が多かったのである。お婆さんが点呼をする役目だった。(成人男性は、私の父がそうだったように空襲警報が鳴るまでは壕には入らない。)

その時は、空襲警報は鳴らず、20分ほどで警戒警報が解除され、私達は自宅に戻った。この頃は毎晩のように空襲があったので、寝る時は寝間着等に替えることなく昼間着ている防寒服やモンペ服(ズボンのようなもの)だけを脱いで就寝した。

突然、母に叩き起こされた。夜中に空襲がある時はいつもそうなので別に驚かなかったが、母は「警戒警報が鳴らないのに外が騒がしい。」と言いながら1歳の妹を背負い、私達は手元のリュックサックを背負って家(店)の外に出た。前にも増して風が強く、とても寒かった。既に多くの人が外に出ていた。なんと隅田川の方が明るくなっていた。

「隅田川の向こう側がやられている！」という近所の人達の声と同時に「空襲だ！ 防空壕に入れ！---」と叫びながら在郷軍人である隣組の班長のお爺さん(50代)が走ってきた。私達は、先ほどの防空壕に駆け込んだ。

防空壕に入って員数確認をし、一息つくまもなく、突然、防空壕の木の扉が激しく叩かれた。『爆撃だ！ 出る！』と叫ぶ男性の声がした。私達は夢中で防空壕の扉を押し開けて外に出た。隅田川の方が明るいだけでなく焰が立ち上がっているのが見えた。その時、初めて「空襲警報」が鳴り出した。空を見上げると、B29が次々と、多分5秒ぐらいの短い間隔で、上野方向から隅田川の方に向かって飛んでいて、その銀色の翼(43m)は家の前の道路(幅約5m)を覆うように大きく見えた。しかも、その速さ(秒速100m以上)、絶え間なく続くその数の多さには、思わず身震いした。数人の男性が、「消火車(後述)」を引っ張って、東本願寺前の都電が走る通り(現在の合羽橋道具街)の方へ走って行った。それに続くように、一緒に防空壕に入っていた他の女性や幼児達は、電車通りを越えたその先にある「東本願寺」の塀沿いに境内の方に走った。そこが避難場所に指定されていたからである。

母が『お父さんの位牌を忘れた！』と叫んだ。我が家までは僅か10mだったので、私達家族は本願寺には向かわずに、我が家に戻った。あの「お婆さん」も一緒だった。2、3分の間のことだったと思うが、位牌を手に持ち下の妹を背負った母と私達子供は、一緒に再び家の外に出ると、東本願寺前の都電の通りには焰が走っていた。焼夷弾が電車通りに立って続けに落ちたのである。通りを越えて東本願寺の方へ逃げるのはもう不可能だった。これが生死を分けた最初だった。---先に逃げた人達は、現在も行方不明である。

後述するが、この「東本願寺」がある西浅草は、先行するB29が後続の本隊の投下目標にするため、最初の爆撃地点に選んだ深川、本所、日本橋と並ぶ4地点の1つだったのである。  
<焼夷弾の焰の中を逃げ廻る>

母が『手を離してはダメ！』と叫んだ。私達は、4mほどの狭い道を東本願寺とは反対の西へ

約1km離れている上野の山を目指すことにした。真夜中なのに周囲がよく見えたが、凄強い強風で秒速10m以上はあったと思う。西へ50m程離れた「松葉公園」迄行くと、そのすぐ先の「松葉国民学校」(私が通学する学校)の周囲に次々と焰が上がっていた。焼夷弾が次々と落ちたのである。西へ行く道が焰で塞がれたので、私達5人とあのお婆さんとは、今度は南に方向を変え、少しでも薄暗い方を目指して路地伝いに走った。まだ爆撃が始まってから30分も経っていないと思われるが、既に周囲は煙に覆われ始めていた。母が「手を離しては駄目！」と、また叫んだ。母は、1歳の妹を背負い、3歳の妹は母とお婆さんに挟まれ、私と7歳の弟はお互いの手をしっかりと握りしめて、その後続いた。一緒に逃げている人の多くは女性と子供で、幼児を背負っている女性が多かった。少数の男性は老人ばかりだったと思う。何れも近所の人達で、息を切らしながら「本願寺の方向に逃げた人はやられたようだ。」と話していた。やがて路地を通り抜けた。途端に、煙に包まれた横殴りの強風に襲われた。もし、3歳の妹の手を離したとしたら、間違いなく、妹は強風と煙に流されてしまったであろう。それほど強い風だった。私達は、菊屋橋の交差点がある広い電車通りに出たのである。息を切らして交差点のところに立ち止まった。この菊屋橋の交差点の東西の道路が「浅草通り」で、南北の道路は南が蔵前で北が千住に繋がる現在の合羽橋道具街で、東西、南北に都電が走る道路でもある。上を見上げるとB29が次々と上野の方から隅田川の方へ飛んでいた。20mはある電車通りを覆うような大きな翼だった。

私達が、更に南の「蔵前」の方を目指して「菊屋橋」の交差点を渡ろうとしたら、先に走っていた人達が「こっちはダメだ！」と叫びながら戻ってきた。その先に焼夷弾が立て続けに落ちてきたのであろう。私達は、やむを得ず、もと来た路地の方へ(北へ)に引き返した。しかし、路地は、煙に覆われていて、狭い両側の家の窓から部屋の中に炎が上がっているのも見えた。(焼夷弾はトタン屋根を打ち抜いて屋根裏に落ち、そこで発火する仕組みになっていた。)

先を走っていた人達が、路地の途中から今度は左に(西へ)曲がって走った。私達は、小さな路地が幾つもあることを知っていた。そのうち、煙が濃い灰色から黒煙に替わり始めた。黒い煙の中に火の粉が混ざっているのである。皆は、煙が濃くない方へと逃げ廻ったのである。気がついてみたら、また、菊屋橋交差点から上野の方に200mほど離れた「浅草通り」に出ていた。道路には強風で剥がれたトタンや板のような物が次々と音を立てながら上野の方から東の隅田川の方に向かって転がって行っていた。

焼夷弾が次々に落ちていたのであろう。通りの先が次々に炎を上げていた。

皆身を伏せた。すると、その落ちた焼夷弾の弾幕の中から焰に包まれた人達が、3人、5人と、まるで「燃えるわら人形」のように次々と現れてはその場に崩れ落ちていった。その距離は20mも離れてはいなかったと思うが、不思議なことに、私には恐怖心は無く、映画の1シーンを観ているような気がした。

突然、また爆風が襲い、あっという間に頭から何かが崩れ落ちてきた。煙で周囲がほとんど見えないし熱気で呼吸が困難だった。防空頭巾が熱かった。爆風で私達はなぎ倒されたようだ。その後、1歳の妹を背負った母と、3歳の妹の手を握る「お婆さん」と、弟と手を握る私とは、

煙と火の粉の中を何とか障害物を避けながら、近くにあった「掘っただけの屋根がない防空壕」に身を伏せた。(こういう無蓋防空壕は沢山たくさんあったのである。)

「このままだと死んでしまうぞ！」と男の大きな声がした。どんな時でも、先導者はいるものである。私達、その場に居た人達は、立ち上がって、前に行く男性の後に従った。今度は方向を変えて西の上野の方へ走り始めた。すると、私達が進もうとしていた方向から何人もがこちらに小走りで戻ってこようとしている姿が見えた。既に、四方が焰と煙に囲まれてしまったのである。そのような中で、私達は、逃げ惑う大人達の後について右往左往した。私達は、上野の手前の稲荷町のところから、今度は北へ東上野の方へ走った。といっても、私達は煙で目をやられていたので、走るのは無理で、前に行く大人を頼りに、手探り状態で障害物や瓦礫を避けながら歩き廻ったようである。

気がつくと、以前の空爆で焼け跡になっていた場所に出た。先導してくれた男性が、その場所へ誘導してくれたのかも知れない。燃える物がない焼け跡とはいえ、熱風と焰と煙に覆われていて、どちらにも進めなかった。母は、背負っていた1歳の妹を今度は抱きかかえ、私達は腹ばいになって顔を土に埋め、もの凄い強風で舞う火の粉を避けた。土に顔を埋めると、数日前に雪が降ったこともあり、未だ冷たさが残っていた。とにかく呼吸が苦しく吐き気がして吐いたが、強く息を吸うと土の中にも酸素があることがわかった。

母が、私達4人の子供に覆い被さるように強く更に強く抱きしめたので、痛いくらいだったが、その時、母は「これで死ぬのだ。」と覚悟をしたそうである。

どれくらい経ったであろうか、遠くから人の声がした。何人かが近づいてきた。消防服を身に着けた人達だった。--- 助かったのである。その場に伏せていた20人程は煙にむせびながら、消防隊の人達に先導されて家屋が並んでいる(即ち、焼けていない)地域に辿り着いた。

そこには赤い消防自動車も停まっていた。私達は、消防隊の人から背中などに水を掛けてもらった。背中から煙が出ていたのである。目も洗った。今度は寒さに震えたが、泣いている大人の女性や幼児も多かった。だが、私達と一緒にいたはずの「お婆さん」の姿がなかった。

<辿り着いた上野の山(上野公園)>

その後、私達は営団地下鉄の地上にある車両基地の横を通って、昭和通りを横切り、上野駅から日暮里に向かう駅のすぐ傍の「両大師橋」を渡って、上野の山に10日午前2時半頃に辿り着いた。通常なら20分程度の道のりを2時間以上もかけて逃げ廻ったのである。

上野の山は既に人で一杯だった。浅草の方を見ると、が焰の帯になっていてその高さは100m以上あったと思う。(記録では、焰は竜巻になって1km以上あったという。)

B29はもう飛んではいなかった。家族を探して大声で名前を呼ぶ声があちこちで響いていた。とにかく大変な数で数万人以上は居たと思うが、おおむね3種類の人に分けることが出来た。第一は顔が煤だらけで着衣は焦げて持ち物が無い人(爆撃直下地域)、第二は荷物を背負い重ね着をした人(類焼地域)、第三は何も持たず防寒具を着ていて心配そうに見つめる人(類焼地域以外)である。多くの人が巨大な焰の方を茫然と見つめていた。

その時、裸足で髪も服もボロボロで体中が墨を塗ったように火傷をしている女性が、赤ちゃ

んを抱いたまま目の前を通った。『死んじゃった!』と何度も叫んだり呟いたりしていた。その眼差しは虚ろでどこか遠くを見つめているようだった。重傷であることは間違いないし、気が狂ってしまっていたと思う。周囲の人達はその女性を見つめてはいたが誰も声を掛けなかった。私は恐怖で身震いした。それは寒さのせいではない、幽霊が歩いていると思ったのである。

どれくらいの時間が立ったのだろうか。『救護隊が到着した。』という声があったので、皆はその方に歩いた。その周囲はとにかく凄惨な数の人だった。既に多くの人が担架に乗せられて地面に横たわっていた。うずくまった姿のままの人も多数居た。私達も長時間行列に並んだ。看護婦さんが手際よく目薬を差し、顔、手に薬を塗って下さった。気がつくとも眉毛も燃えてチリジリだったが、甲斐甲斐しく動く看護婦さんが天使に見えた。

<灰燼に帰した我が家の跡地に戻る>

朝になった。8時頃、多くの罹災者と同様に、私達も自宅跡に向かった。まだあちこちに煙が立っていて明らかにそれと分かる異臭が立ちこめていた。(この「異臭」だけは、理解してもらえないと思う。) 途中、多くの遺体の傍らを通った。不謹慎な表現だが、炭火のような遺体、焼けたマネキン人形のような遺体、服を着たまま寝ているような遺体に大別できた。壕の中で伏せた状態の遺体が特に多かった。空は晴れていて風はほとんど無かったが、煙が漂っていて炭火のような粉(!)が時々宙を舞い異臭が激しかった。

灰燼に帰した自宅跡で、同じ町内に住んでいた叔父(父の弟)夫婦と再会できた。一緒に、近くの松葉国民学校(小学校)に向かった。震災などの災害の時は小学校に集まることになっていたのである。小学校の校舎は教室などの内側は焼けてしまっていた。「おばさん」を探したが見つからなかった。叔父は「これから勤め先の様子を見に行かなくてはならない。」と言って、夫婦で立ち去った。(叔父は、軍需工場に勤めていたが、その翌日から死体処理の作業に当たることになったという。)

昼頃から、私達は麴町半蔵門にある伯父の所へ向かって歩きはじめた。上野から上野広小路、末広町、万世橋へと歩いた。多くの罹災者が黙々と歩いていたが、類焼地域からの人達だろうか、荷物を背負った人達が意外に多かった。所々に、僅かだが、今回の空爆で焼けていない地域があったのがかえって異様だった。神田あたりに近づくと、10日以前の空爆で焼け跡になってしまった地区もあったが、本屋街のある神田神保町の辺りまで来ると、家並みが残っている場所に出た。そこの住民の皆さんが炊き出しをしていた。私達は「すいとん汁」を頂いた。その日の初めての食事だった。体の芯まで温まる思いを噛みしめながら、思わず涙が溢れてくるのを抑えることが出来なかった。母が、炊き出しの人達に何度も頭を下げていた。炊き出しに並んだ人達の殆どは荷物を身につけていない人達だった。

そこからは都電が走っていたと思う。私達は、都電に乗って九段坂の靖国神社の横を通り半蔵門まで行ったように思う。信じられないような話だが、この日、靖国神社では、陸軍記念日の祝典が執り行われたという。

後日、母は、『お父さん(位牌)がお前達を救ってくれたんだよ。』と話してくれた。「位牌」を我が家に取りに行ったことが生死を分けたのである。その「位牌」も逃げる途中で無くなって

いた。私達の身替わりになってくれたのであろう。残念ながらあの「お婆さん」は、現在も行方不明のままである。

<再び疎開先へ>

麴町の伯父の家で数日お世話になった後、私達は千葉の疎開先に戻った---

その数日後、在郷軍人会の人が来て『東京の下町が爆撃で無くなったなどというような嘘話をしないように。』と母に念を押していた。母は黙って頷き、そのまま「松の根掘り」(代用ガソリンを採る)の勤労奉仕に出かけた。

翌月の4月から、私は、疎開先の国民学校で4年を迎え10歳になった。そして8月の終戦を疎開先で迎えたのである。母は、生活のため、焼け跡になった我が家の土地を僅かな値段で売り、酒屋の権利も売って相応の現金を手元に置くことが出来たようであるが、戦後の激しいインフレとそれに伴う「新円切り換え」(預金を封鎖して、百円を新円の1円に交換するインフレ対策)でそのほとんどが価値を失った。大量の「戦時国債」も紙くず同然になっていた。母や私は疎開先で農家の手伝いをしたが、極貧生活だった。

<その後>

1. このような事情もあり敗戦の翌年、私1人が麴町の伯父の家に居候することになった。

伯父の家も東京大空襲の2ヶ月後の5月25日の空爆で焼失していて、トタン板で囲ったバラック小屋を建てて住んでいた。雨漏りには困ったが、それ以上に空腹が辛かった。フスマ(小麦の皮のカス、通常は豚などの餌)を煎餅のように焼いて食べたりした。焼け跡に小さな畑を作り、カボチャやサツマイモを栽培するのを手伝った。半蔵門のお堀の野草を摘んで食べた。

昭和21年4月から千代田区立麴町小学校5年生になった。焼けた校舎の1階が教室で2階は外地から引き揚げて来た人達が密集して住んでいた。「ララ物資」の給食が始まり飢えは多少凌げたが、一つ机に男女が並んで座る方式にはなかなか慣れなかった。

麴町小学校は「民主主義のモデル校」だった。私が通っていた浅草区立松葉小学校は「軍国主義のモデル校」で私は「軍国少年」を自負していたが、麴町小学校に通い始めて半年も経たないうちに「デモクラシー少年」に大変身していた。『教育の力、畏るべし。』である。あるいは『体験の力、畏るべし!』か?---

2. 余談になるが、その後、私は都立日比谷高校に通うようになった。高校卒業時に肺結核と診断された。医師の先生から『煙を沢山吸った経験はないか?』と問診された。私が3月10日の話をすると、先生は『そうだったのか---。』と言われじっと目をつむって無言になられた。後日、知ったことであるが、なんと先生は3月10日に、煙で肺をやられた重症者を数多く処置されたということで、その多くは1年を経ずして亡くなったという。先生が黙ってしまわれたのは、私も間もなく死ぬと予感されたのか、3月10日のことを思い返されたからなのかは分からない。(なお、3月10日の死者数は、24時間以内の死亡者が約10万人とされているが、前述のように、負傷して1年後ぐらいまでに死亡した人は相当数いるのにカウントされていない。広島、長崎の被爆者が今でもカウントされているのに比較すると違和感を覚える。)

その後、私は自宅療養することになったが、当時、肺結核は死に至る病とか伝染病だといわ

れていたのに、母はこれを隠すのに苦労したという。やがて特効薬であるストレプトマイシンが安価に手に入るようになり、そのお蔭で治癒し、戦時中のことを研究したくて早稲田大学第1文学部国史科に入学した。しかし東京大空襲の恨みがあったのだろうか、学生運動などに加わり、挫折し、中退する始末だった。

気持ちを入れ替えて一橋大学法学部に入学したのは24歳の時だった。

考えてみれば母には随分迷惑をかけたものである。

#### <付1> 爆撃したB29のパイロットの話

チェスター・マーシャル著「B-29 日本爆撃30回の記録」(210~215頁)

B-29のパイロットだったチェスター・マーシャルは、次のように語っている。

「3月9日の朝、(カーチス・ルメイから受けた)ブリーフィングの指示内容は、『東京を火の海にするため、B-29を334機、空中に上げる。その約1時間前に先導機12機が出る。先導機は、目標区域の周囲に正方形の輪郭を火で描き、われわれ後続機はその枠内に投下する。先導機以外の全機は新型の500ポンド(227kg)のM69収束焼夷弾24発(約5.5トン)を搭載して行く。このM69には7ポンド(3.2kg)の小型焼夷弾(36発)を金属の帯で束ねて、時限装置を付けている。投下して地上に近づくと収束が解かれ、各1機が搭載する小型焼夷弾(合計約860発)は、進行方向の後方1.5マイル(2.4km)、横に0.5マイル(0.8km)の範囲に散らばって落ちる(注1)。戦闘機の反撃はあっても軽微だと予想する。そこで、(焼夷弾を多く積むため)防戦用の弾丸は尾部銃塔にのみ搭載する。投弾高度は(これまでの高高度約1万mではなく)5千~7千フィート(1525~2135m)の低空とする。』というもの。この超低空飛行の爆撃計画に対して、幕僚達は『特に低空飛行での爆撃だと、空襲部隊の75%を喪う。』と予言したが、ルメイはこれを押しつけたという。この話を聞いて搭乗員達はしばらく塞ぎ込んで、ルメイを呪う者さえいた。」「(9日の夕方、離陸すると、あまりにも密集した編隊なので)、飛行機の編隊燈をつけるな、と命令されていたため、まわりのB-29と衝突する危険を懸念した。」「海岸線に到着する約30分まえから前方にオレンジ色に輝く火の色が見え、緊張が高まった。先導機が地上に目印をつけているのだと了解された。」「東京に近づくにつれて、眼前に身の毛もよだつ光景が目に入った。あちこちに巨大なサーチライトの光が立ち、わが飛行隊の1機がピタリと照らし出されてきらめき、空を行く幽霊機のような。そのまわりで対空砲火が炸裂するのが見える。だが、B-29はひたすら前進し続けている。更に前方では、火が広がり都市の目標地域が火炎地獄と化していた。焰が数千フィートにも舞い上がり、煙が黒雲となって2万フィート(6km)にまで立ち登っている。」「飛行機が投弾区域に入ると、一帯は真つ昼間のように明るかった。火の海に近づくにつれ、指定区域全体が陰鬱なオレンジ色の輝きに変わった。私は、前方の飛行機から投下された焼夷弾が地を打つ光景を見て息を呑んだ。」「焼夷弾は、地面に当たった瞬間、沢山のマッチを一度に擦ったように見え、何秒もしないうちに、その小さな焰の群れが集まって、単一の大きな火焰の塊となるのだった。私たちは、なめずる火の先端あたりに荷(焼夷弾)を一度に投下して、沸き起こる煙の雲の中に突っ込んで行った。途端に真つ暗になった。コックスと私は、荒れ狂う気流に揺れる飛行機の安定を保とうとして必死に操

縦した。そこへ、いきなり妖怪が出たか、と思われた。燃えさかる火で起こった下から熱風による強烈的な上昇気流に機体(54 トン)が持ち上げられ、極度に大きいG(重力)のために座席に引きつけられて身動き一つできなくなった。何が起こったのかを考える余裕が出来たときには、高度が5千フィート(1500m)以上も上がっていた。急に身軽になった。ここでようやく私たちは火焰地獄の掬め手から逃れることができたのだ。私たちは、焼ける人肉やがらくたの異臭に息が詰まる思いをしていたので、ようやく煙から脱して本当にホッとし溜息を大きく吐いた。」「復航(帰路)は何事もなかった。(3月10日の)午前10時に着陸し、審問を受け、食べて、その後は眠った。」(注2)「情報部が東京大空襲の結果を写真で判定して、われわれが起こした火災は強風に助けられて東京の16平方マイル(25.7平方km)を完全に焼き尽くしたと言っている。」

(注1---土師野)1機が約860発の小型ナパーム焼夷弾を約2平方kmの範囲に投下するわけで、280機合計で24万発ものナパーム焼夷弾を、爆撃直下地域に投下したことになる。

(注2---土師野)著者がグアム島で眠りに就いた頃、私達は、炭化した遺体を避けながら、異臭が漂う中、我が家の焼け跡に辿り着いて呆然と立ち尽くしていたのである。

#### <付2> 最初の爆撃地点だった「東本願寺」周辺の地理的状況

この辺りは、ほとんどが2階建ての木造家屋の密集地帯だった。我が家の直ぐ傍の電車通りを隔てて「浅草東本願寺」がある。浅草には寺院が多くあり一番有名なものが雷門の浅草寺であるが、その次に著名なのが東本願寺で、その本堂は浅草寺の本堂と同じぐらい巨大なものでひととき目立っていた。この東本願寺の塀沿いに都電が走る通りがあり、我が家は、本願寺の塀から電車通りを隔てた50m程の所にあった。この電車通りは、南は浅草橋から菊屋橋、合羽橋と続き、北は入谷、南千住に至る。皇紀2千6百年の祝賀行事の時には、何台もの花電車が走ったものである。この菊屋橋と合羽橋の間の商店街が現在の「合羽橋道具街」である。また地下鉄銀座線が東の浅草駅から田原町駅、菊屋橋の下を通過して、西は稲荷町、上野駅へと走っていた。この通りを「浅草通」と呼ぶ。自宅の隣は「松葉湯」という銭湯で、すぐ西に小さな「松葉公園」その先に「松葉小学校」があった。この小学校がこの辺では唯一の鉄筋コンクリート造りの建物だったといつてよい。

#### <付3> 何故、体験談をする気になったのか。

次に、何故、最近になって体験談をするようになったのかを記しておきたい。

- (1) この体験を思い出す時、私は「感情麻痺」という言葉でしか表現できないものを感じる。焼夷弾の弾幕の中から、焔に包まれた人達が「わら人形」のように次々と現われてはその場に崩れ落ちていった様子が、まるで映画を観ているように見えたというあの感情のことである。極限状態になると、精神的には耐えられなくなるので、人間には「感情麻痺」という生物としての自己防衛本能が働くのではないだろうか。戦場で兵士が通常では考えられないような残虐行為を行った時の「感情」もそうかも知れないが、戦時中は銃後でもほとんどの日本人がこの「感情麻痺」になっていたと思う。この「感情麻痺」の状況のことを、正常な人達の前で語ることは無理ではないかと思うところがある。戦後、戦地から帰国した兵士の多くが戦場でのこ

とを黙して語らない人が大勢居たが、あの人達の気持ちが分かるような気がする。

- (2) 次に、東京大空襲の直後は当然として、戦後になっても、例えばベトナム戦争の北爆のテレビなどを観た夜など、私は爆撃の焰の中を逃げ廻る悪夢を何度も見たものである。今から 30 年ほど前も、事情があって小さな会合で体験談を語ったところ、その晩、焼夷弾の油脂が私の背中に張り付きそれが心臓に向かって身体を焼き裂いていく夢を見た。必死に逃げるのだが油脂が内臓をゆっくり焼いていく---。悲鳴を上げて目が覚めたら、体中からねっとりとした脂汗が出ていた。それ以降、一昨年まで、30 年近くまた沈黙するようになった。
- (3) 夢にうなされるのが辛かったというだけでなく、体験談といっても、所詮逃げ廻った何十万人の中の 1 人の極く局部的なものでしかないし、当時 9 歳 11 ヶ月の少年だった私のそれも異常時の体験にどれだけの客観性があるのか、その上、何度も夢を見たので夢と混同してしまっていないかと迷うこともあった。例えば、当時 7 歳の弟は「死体を踏み越えて逃げた。」と思い込んでいたが、事實は、転んだ人を踏んだだけだった、というように。当時 3 歳 11 ヶ月の妹には当時の記憶がほとんどないようだ。だが、当時の私ぐらい、10 歳頃からの少年の記憶力は、極めて良いらしい。戦後、母は、当時の私の記憶の鮮明さには舌を巻いていた。というわけで、私も「語り部」が務まるかも知れないと思うようになった。
- (4) 東京大空襲の時に、最初に爆撃の目印とされた東京下町の 4 地点の一つの「東本願寺」の直ぐ傍に住んでいた。この爆撃直下に住んでいて現在も当時の記憶を語れる人(当時、国民学校在学以上)が、ほとんど生存していないことに気がついた。
- (5) 更に、西浅草で被災した「語り部」が非常に少ないことにも気がついた。これは、西浅草の死亡者が非常に多かったことを意味すると思う。隅田川の東側の墨田区や江東区は、運河のような掘り割りが多かった。運河に飛び込めば助かる可能性があったのである。しかし、西側の台東区には運河がない。周囲を爆撃されれば、逃げる場所、飛び込む運河がないのである。
- (6) 戦後 80 年も経つと、当時小学生だった世代が 90 歳を超えるようになり、次々と逝去されるので、被災者である語り部が当時幼児だった人達の手任せられるのはやむを得ない。ところで、この人達の「語り」を聴いたり手記を読んだりすると、あることに気が付く。話がリアルであればあるほど、親から聞いた話だとしか思えないような内容を、あたかも本人の実体験として語られることが少なくないのである。
- (7) 次に、私の体験は何十万の被爆者の中のたった 1 人の体験でしかないが、肌に触れてみなければ人の温もりが分からないように、体験した者でないと伝わらないものがあるとも思うようになった。
- (8) 私は、これまでも東京大空襲の「語り部」の方達の多くの体験記を読み、体験談の多くにも耳を傾けてきた。どの方の話も、体験した者なら直ぐに通じるものがありいつも胸を打たれる。ところで、語り部達は、若者達に話す最後に必ず「皆さん！戦争だけは絶対に起こしてはいけません。」で話を結ばれる。これを聴くと、私は、広島にある原爆死没者慰霊碑の碑文にある「安らかに眠ってください。過ちは繰返しませぬから」を思い出す。「過ちは繰返しませぬ」には主語がないから、私達日本の一般国民が主語(加害者)ということにもなるのである。換言

すれば、「私達、日本の一般国民は、原爆を落とすような過ちは繰返しませぬ」とも受け取られかねない。これと同じように、「皆さん！戦争だけは絶対に起こしてはいけません。」と呼びかけられると、その「皆さん」とは、私達一般国民(市民、庶民)ということにもなってしまう。だが、戦争を起こすのは、時の権力者であって「皆さん」ではない。「皆さん」は、権力者の命令に従って戦わされる側なのである。

だから「語り部」は「皆さん！戦争を引き起こすような権力者が現れないように、いつも監視しててください。」という言葉で締めなくてはならないと思う。

このこととの関連で、最近、毎日新聞(令和 8 年 1 月 12 日)朝刊の投書欄「みんなの広場」に載った高校生の「平和学習をもっと能動的に」という記事を感じながら読んだ。この投書は、修学旅行で広島に行き平和学習の体験をした後の感想文で「--- 私たち学生は、常に戦争はいけないと教え込まれてきた。しかし、戦争が良くないことは当たり前である。---- 今の平和教育は、ただ一方的に「戦争はダメだ」と教え込むだけで、学生の能動的に思考する意欲を押しつぶしているように感じられてしまう。戦後 80 年を過ぎ、戦争体験者が少なくなった今こそ、元来の一方的な(消極的な、の意：土師野)平和教育を見直すべきではないだろうか。」というものである。誠に鋭い発言で、前述の「これまでの語り部」の「語り」が、消極的で若者達に「それではこれから何をすべきか！」を説いてはいないことを指摘しているのである。

(9)「何故このような戦争が起きてしまったのか」を語る語り部が殆どいないのも、私には、不思議に思えてならない。ましてや、私が、後述の参考事項で記述したようなこと、例えば、何故「現人神」というようなフィクションを信ずるようになってしまったのかとか、東京大空襲の 2ヶ月程前の昭和 20 年 2 月に「平和交渉をすべし。」との近衛上奏文があって、もしこれに基づいて「平和交渉」を始めていれば、東京大空襲も原爆も回避できた可能性もあったのに、これが拒否されて戦争を継続したのは何故かも語るべきであろう。

このような事も、私が語らなくては、と思うようになった動機である。

(10) 現在の日本の為政者達は、戦争のことを全く知らない世代になってしまった。この為政者達に、爆撃の中を逃げ廻ることの悲惨さを理解させるのは難問であるが、それ故に、私の身近に居る人達、特に、次の世代を担う若者達に語り継ぐ必要があると思うようになった。

(11) 私は、ウクライナの空爆やガザの爆撃をテレビなどで観ると、爆弾が落ちてくる被害者の側の目でしか観ることが出来ないのだが、このような時にこそ、戦争の被害体験者である私のような者が、何も語らなくて良いのだろうかと思うようになった。そして、何よりも「東京大空襲の死者達」が私に対して『再び戦争を起こさせないために、東京大空襲を語れ！それが生き残った者の務めなのだ！』と呼びかけて迫ってくるような気がしてきたのである。

(12) 幸い、私はもう 90 歳で、多分感覚も鈍くなっており、体験談を語ったからといって夢でうなされることにはなるまい。東京大空襲で死亡した人達は、私の仲間なのだから---

以上

この体験談を、私の最愛の孫達--- 夏帆、隆之介、虎之介に贈ります。

## 【 参考資料 】

### < 1 > 東京大空襲の概要

1945 年 (昭和 20 年) 3 月 10 日午前零時頃から約 2 時間半、米空軍 B29 爆撃機 約 280 機が、約 2 km の低空で強風下の東京下町に襲来した。まず本所、深川、西浅草、日本橋の 4 地点に大型焼夷弾を投下。その焰を目印に、人口密集地域に 1,650 トンの高性能焼夷弾を投下し、東京の下町は灰燼に帰した。

1. この空爆の直下地域は約 15 平方 km (4km×3.5km?)。主に現在の台東区、墨田区、江東区で、当時の人口は約 60 万人。そのうち、死者・行方不明が約 10 万人、負傷が推定で最大 40 万人と言われるが、その実数は不明である。
2. また、類焼した地域は約 25 平方 km。主に荒川区、中央区、千代田区の一部で、人口は約 40 万人。類焼なので、この地域の住民の死者は幸い少なかった。
3. この僅か 2 時間半の爆撃により、東京の下町約 40 平方 km (6km×6.5km?) が灰燼に帰し、死者を含めて約 100 万人の住民が被害を受けた。この焼失地域及び被害者数は、1923 年の関東大震災の被害と概ね重なる。
4. 東京大空襲の被害は、原爆被害に比べ、極めて認知度が低い。その理由は、戦時中は日本政府が箝口令を敷き、戦後占領軍もその悲惨さを秘匿したためである。
5. 死者や負傷者に女性や幼児が多い。即ち、非戦闘員がほとんどだったということ。その頃の東京下町には、成人男性の大半は召集などで居らず、また小学校 3 年生以上の子供の多くが疎開していたので「遺体の 7~8 割が女性と幼児」であった。
6. 『東京大空襲』という場合、特にこの 3 月 10 日の空爆を指すが、その後、東京だけで同規模の大空襲は 4 回 (小規模のものを含めると約 120 回) あった。
7. 空爆は全国に及び僅か半年で 150 以上の大小の地方市街地が灰燼に帰した。
8. この日本空爆を計画し指揮したのが米航空軍のカーチス・ルメイで、彼はベトナム戦争の北爆も指揮した。ところが、このルメイに対して、戦後、佐藤内閣は、航空自衛隊の創設に貢献したとして「勲一等旭日大綬章」を授与した。
9. 世界史的な意味---原爆被害と並び「人類史上最大の無差別虐殺事件」である。  
僅か 2 時間半で、① 10 万人以上の非戦闘員を計画的に虐殺した。逃げ回った被災者は約 100 万人で、負傷者もその火傷などの程度にもよるが、10 万人から推定最大 40 万人になるという。② 火災の規模としても世界史上最大である。

### < 2 > 東京大空襲の各論

1. 日本の防空体制、消火体制、防空壕
  - (1) 防空体制---レーダー網は貧弱。高射砲は高高度用長距離砲が主で低空飛行には対応困難だった。防空戦闘機は数も少ない上、3 月 10 日には発進が遅れた。
  - (2) 消火体制---『火災現場は戦場と同じ、持ち場を死守せよ!』が『防空法』で義務づけられていて、町内の成人男性 (と言っても 40 歳以上がほとんど。当時の平均寿命は 50 歳余) は「消防隊」の構成員だった。町内には何台も「消火車」があったが、主に荷車に手押ポンプ

を載せたような代物で、ホースの水も2階の屋根に届くのがやっとだった。バケツリレーと火消し棒での消火訓練も頻繁に行われ、在郷軍人会の人が訓練の指揮を執っていた。

バケツの水でどれだけ火災が消えるかという疑問は誰もが抱いていたと思うが、消火訓練の最大の欠点は、火元は前方にのみあるという想定であって、焼夷弾がバケツリレーの真上や後方に落ちてきたらどうするのかという訓練は全くなかった。そもそも、訓練そのものよりも訓練に参加したという証拠になる「点呼」の方が嚴重だった、と母は言っていた。

誰にとっても、その訓練の労力提供は大変だったし、本番では全く役に立たなかった。

### (3) 防空壕

(a) 防空壕が、セメントで頑丈に囲われた「シェルター」のようなものと想像したら大間違いである。私の父の店は酒屋だったので地下室があった。醤油や味噌樽が置いてあってセメントの壁で囲われ8畳ほどの広さがあったので、かくれんぼ遊びが出来た。これならシェルターと言えたと思うが、空爆の際は、家屋の中にいると爆撃の火災で焼死するということで、屋内の地下室に避難することは禁じられていた。

そこでと言うわけでもないだろうが、やむを得ず、屋外に、簡単な、と言うことは直ぐに外へ逃げ出せるような防空壕が、道路沿いに、数軒おきに掘られていたのである。

防空壕といっても、東京の下町は5mも掘ると水が出るので、主に道路沿いに長さ数m、幅1.5m、深さ2m程の穴を掘り、木材で周囲を囲い、木と土とトタンの屋根を載せた程度のものである。セメントは軍需用品だったので使えなかったのである。

下町の道路沿いの防空壕の大きさを的確に表現するならば、棺桶を3つ並べ、それを3層に積み上げ、そのブロックを3列連結すると、27個の羊羹型の棺桶を置くことが出来る、これが典型的な下町の防空壕と言って良い。そこは、原則として隣組数軒の家族が決められた防空壕に入ることになっていて、当時は子供が4人居る家庭が当たり前だったので大人数人とその子供十数人の20人も入れれば寿司詰めとなる。屋に空襲があった場合には、通行人も飛び込んでくるので満員電車並だった。防空壕の中では、片側に1列に壁に向かって座る。女性は大抵乳飲み子を背負い幼児を膝の上に置く。私や弟は、隙間の地面に直に座る。向き合って腰掛けるスペースはなかった。突然起こされた乳児達が次々と泣き出す。オシッコやウンチを漏らす幼児が居る。雨が降ると雨水で土の壁が濡れ、足下には泥水が溜まっていて運動靴が濡れて凍えるようだった。皆、我慢するしかなかったのである。

数十メートル離れた所に爆弾が落ちた場合、防空壕に入っている人は助かる。これが有蓋式の防空壕の利点だったが、直撃されると全員即死は免れないので、防空壕は、間違いなく棺桶だったのである。なお、覆いがなく爆風を避けるだけの無蓋の防空壕も多かった。

東京の下町でも、学校や公共施設には、空襲以前からコンクリートで固めた地下室があったが、東京大空襲の時、そこに避難した多くの人が焼死したのである。

(b) 「防空壕」は消火活動をするための「待機壕」だったので「待避壕」と呼ぶことは禁じられていた。警戒警報が鳴ると、防空壕に入るのは子供と女性と男性は老人だけで、成人男性は「消火車」<手こぎの消火ポンプを載せた手押し車で、20世帯に1台ぐらいあった>を

倉庫から出すために走り、消火体制を整える。空襲警報が鳴ると男性は初めて防空壕に入る。近くで爆撃による火災が発生すると、男女を問わず成人は、防空壕から出て消火に当たる。二度ほど、近くに（と言っても数百メートル先だったが）爆弾が落ちたと言って、空襲警報で待機していた2、3人の成人男子が壕から飛び出していったが、その勇姿には子供ながら感動したことを覚えている。だが、消火活動中に真上から爆弾が落ちてきたら？---ということは考えてもみなかった。成人男性は、爆撃の最中でも火災が発生したら消火活動することが法律で定められていて、東京も戦場だったのである。

- (c) 空襲で一番怖かったのは防空壕の中でじっとしている時だった。二度しか経験はなかったが、爆弾が落ちる音が「ダーン、ダーン」とだんだん近づいてくるのである。すると、土壁がザラザラと不気味な音を立てて落ちた。その時は大人でも恐怖で歯をカチカチと鳴らす人が何人も居て、聞きとれるほどだった。在郷軍人会の役員で消火訓練の陣頭指揮を執っていた老人（と言っても50代）も「歯がカチカチ組」の1人だったので、大人にもこのような二面性あるのだと思って、安心したものである。

防空壕の滞在時間は、空襲警報が鳴ってから大体30分程度だった。空襲が解除されて外に出ると「隣町の誰々さんが死んだ。」という話が囁かれた。ロシアン・ルーレットのようなもので、毎日のように下町は空爆を受けたので、1km四方で、必ず、どこかの防空壕かその傍に爆弾が落ちて、誰かが死んだり負傷したりした。ブラックユーモアとしか言い様がないが、東京下町の「防空壕」は、現代のシェルターなどとは全く異なり「棺桶」でもあった。なお、私が怖かった本当の理由は、父が、防空壕の中で被弾したので、同じ死に方をする運命にあると、子供ながら思っていたからである。

- (d) 今だから言えることだが、防空壕で誰かがオナラをするとその異臭に耐えるのは辛かった。密室の拷問である。当時は、毎日、サツマイモや馬の餌のような食物ばかりを食べさせられていたので、ガス漏れはお互い様で仕方なかった。戦後、洋画の「禁じられた遊び」を観た時だったと思うが、子供達が戦争ごっこをしていて、毒ガス(オナラ)で戦う場面があった。思わず笑ってしまったが、妙に納得したものである。ガス漏れだけでなく、母の話によれば、オシッコを漏らす成人の女性も少なくなかったという。いわば極限状態なので、思わずお漏らしをしたり、歯がガタガタ音を立てる大人がいてもやむを得ないと思う。爆撃があれば、1km以内で必ず何人かは即死しり負傷したりしたのだから----

体験談で、防空壕の中での「ガス漏れ」のような話を聞いたことはないが、体験談で一番伝わらないのは、このような「匂い」なのである。

- (e) 何れにしても、当時の東京下町の防空壕は、爆撃が始まったら、そこで死ぬか、素早くそこから飛び出して逃げ廻るかの2つの選択しかなかった。防空壕を「待機壕」とは呼ばせたのは「言い得て妙」としか言い様がない。
- (f) 当時の日本の為政者には、国民(一般市民)を護るという意味での「国防意識」が、いかに欠けていたかは「消火訓練」と「防空壕」を見ればよくわかる。彼等は、そもそも、空爆の最中、このように貧弱な防空壕で、歯をガタガタと震わせながら耐えたことなど全くなかつ

たのだから。

## 2. 最初の爆撃地点

(1) 3月10日午前零時頃、先発隊のB29が東京湾と房総半島の2方向から1,500~2,500mの超低空で侵入し、零時8分から、現在の①江東区深川木場、②墨田区本所、③台東区西浅草・本願寺横(なんと、私の家があった地点である)、④日本橋の4地点に、特殊大型焼夷弾を集中投下した。これにより4地点の周辺は数分で火の海になった。それを目印に後続のB29が無差別爆撃を開始した。最初の爆撃火災で出動した数十台の消防車は後続機の爆撃でほぼ全滅したという。これも狙いだったという。

(2) 第1弾投下後7分経った零時15分になって、初めて「空襲警報」が発令された。高射砲高射砲が応戦を始めた時には、後続の2百数十機のB29による爆撃が進行していた。は主に長距離砲だったので、B29の遙か上空で炸裂したという。防空戦闘機は発進も遅れたし、竜巻のような焰の中は飛ぶことが出来なかった。

## 3. 爆撃開始後7分も経ってから「空襲警報」が発令された理由

戦後確認されたことであるが、東部軍司令部の責任者が、零時少し前に房総半島沖に、B29が2機飛来しているのを認識していながら、『22時30分の警戒警報が解除されて、天皇陛下がご就寝されたばかりだし、今度も偵察飛行だろうから少し様子を見よう。』と忖度したことがあったという。この2機は空爆隊の誘導機だった。

## 4. 市民の虐殺を前提にした東京空爆計画

(1) この日、東京の真南約2,300kmにあるマリアナ諸島のグアムやサイパンなどを発信したB29は約330機。そのうち武装をせずに焼夷弾のみを9トンも積んで爆撃を遂行したのは約280機だという。その他のB29は、機関砲などで武装した護衛役の機、指令機で、おまけにマスコミという観客を乗せた観察用のB29まであったという。

(2) 爆撃を行った280機は、大型焼夷弾は30m間隔、小型M69焼夷弾は15m間隔で着弾するように爆撃した。その結果、M69ナパーム焼夷弾は60万人が居住する木造密集地域に短時間で約40万発投下された。

(3) 当時、爆撃直下地域には約60万人が住んでいたが、逃げ道が焰で閉ざされ、焼死10万~12万人、負傷は20万人から最大40万人となった。なお、類焼地域の住民約40万人を含めて、合計被災者が約100万人、約27万戸の家屋が焼失した。当日は10~15mの強風が吹いていたことも被害を大きくしたが「神風」は米軍の味方をしたのである。

(4) 日本空爆を計画し指揮したのが、米国航空軍の司令官のカーチス・ルメイである。彼はベトナム戦争の北爆も指揮した。このような人間に対して、戦後、佐藤内閣は、航空自衛隊の創設に貢献したとして「勲一等旭日大綬章」を授与した。なんと、その佐藤栄作はノーベル平和賞を授与された。これ以来、私は自民党には投票しないことになった。

## 5. 遺体の処理と負傷者のその後

(1) この空爆による死者は、原則として爆撃後数日以内の死者である。

(a) その頃の東京下町には、成人男性の大半は召集などで居らずまた小学校3年生以上の子

供の多くが疎開していた。従って「遺体の7~8割が女性と幼児」であった。この事実は「非戦闘員の殺害」の中でも特筆すべきことであるが、それは別にして、その遺体の処理は、作業要員不足からその日はほぼそのまま放置された。

(b) ところが、天皇の被災地視察が決まると『遺体をご覧に入れるのは恐れ多い。』として、小菅刑務所の囚人などを動員し、数日で現在の隅田公園などに遺体を埋めた。私の叔父もこの作業に加わったという。---このため多くの遺体が身元不明になった。前述の「おぼさん」も行方居不明である。

(c) 天皇は3月18日に深川や西浅草などを視察され『関東大震災よりも遙かに無残だ。』と感想を述べられたという。にもかかわらず、為政者達は、東京大空襲後になっても「即時和平論」を抑えて「皇統(天皇統治の国家)を護るためには本土決戦もやむをえない。」として「一撃後和平論」に固執した。その結果、その後の5ヶ月間の空爆で、本土の市街地の大半は灰燼に帰し死者は原爆の死者を含めて更に40万人も増えたのである。「一撃後、和平論」に固執した為政者の責任は極めて重い。

(2) 火傷などによる負傷者は、当時、数万人程度と言われていたが、最近の研究では40万人という数字もある。爆撃地域の当時の居住者は約60万人というから、死者10万人を加えると死傷者が50万人で死傷者率は83%にもなる。私達の家族5名は、現在の基準で言えば「軽傷」と「重傷」の中間程度だと思うが、これまで被爆調査を受けたことは1度もないし、この負傷者40万人にも入っていないと思うが、あの包囲爆撃では、爆撃直下地域のほとんどの人が負傷していたと思うのが妥当であろう。

(3) 重傷者の相当数は、1ヶ月後から数年の間に死亡したといわれ、多分1~2万人になると想定されるが、この数字は(1)の死者には含まれていない。

(4) 空爆被害に対する「国家補償」は、原爆被害を除き、全く行われていない。国家と国民の間には、特別の契約がないので被害者には受忍の義務があるということがその根拠になっている。

6. 大本営発表 --- 空襲があった当日正午の発表は、次のとおりだった。

『本3月10日零時過ぎより2時40分の間、B29約130機、主力を以て帝都に来襲、市街地を猛爆せり。右猛爆により都内各所に火災を生じたるも、宮内省主馬寮は2時35分、その他は8時頃までに鎮火せり。現在迄判明せる戦果次のごとし。撃墜15機、損害を与えたるもの約50機。』

--- 大本営の発表とはこの程度のものだった。10万人以上の人間が焼死したことは伏せて、皇居内の馬小屋が焼けたこと(馬が死んだこと)を採り上げざるを得なかったことに、日本の為政者の断末魔の叫びを聴く思いがする。ちなみに3月10日は「陸軍記念日」で、昼から代々木練兵場で陸軍軍楽隊が先導して「日露戦争：戦勝記念行進」が行われ、靖国神社や全国各地の神社では戦勝祈願が行われたという。

7. 東京大空襲被害の報道規制など

(1) 当時、政府は本土決戦を覚悟していたので、徹底した報道規制を行った。当然焼け跡の写

真などが新聞に載ることは全くなかった。そもそも庶民が街の写真を撮ることはスパイ行為だと見做されていた。

- (2) 戦後、進駐軍も空爆の悲惨さを隠すため報道規制をした。例えば、警視庁の報道写真家の石川光陽氏が、3月10日に浅草、西浅草、深川などで撮った生々しい写真が現存するが、その写真を進駐軍から隠すのに苦慮したという。
- (3) 戦後、石川光陽氏の写真が公表された時、私は本当にショックを受けた。何故なら、私が見た悲惨な光景と同じ光景が写真に写っていて、「私が見た光景が幻想では無く現実」だったことを認めざるを得なかったことが衝撃だったのである。

### < 3 > 日本各地の空爆

1. その後の東京空爆---4~5月に東京山の手を中心に大規模空爆は4回。B29延1,500機。焼失面積は3月10日よりも広がったが死者は8千人(!)に留まった。終戦までに、東京の市街地の空爆は延60回、郊外を含めると約120回あった。
2. 横浜空爆---横浜だけで大小約50回の空爆があり、延5,400機が来襲し、死者・行方不明約1万、負傷約5万、罹災者約65万、全焼家屋約15万戸という。最大の空爆は、5月29日午前9時半から昼頃まで、B29が517機、P51戦闘機も101機加わって横浜の人口密集地域を爆撃。焼夷弾43万発。死者・行方不明約4千、負傷約1万2千、罹災者約31万。  
なお、最初の横浜空爆は、後述のドウリットル空爆で、機銃掃射で幼児1名が死亡した。
3. 日本各地の空爆---硫黄島陥落でP51新鋭戦闘機が護衛に加わるようになり日本軍は制空権を失った。終戦までに全国約150の市街地の大半が焼失した。僅か半年で、日本本土空爆の合計死者数は原爆死を加えると約50万人といわれている。
4. ドウリットルの空爆---日米開戦から僅か4ヶ月後の1942.4.18の白昼、米空母からB25中型爆撃機14機が東京・横浜・横須賀を爆撃、他の2機が名古屋・神戸などを爆撃。指揮官はドウリットル中佐。日本の死者は45名。この空爆で日本の防空体制の脆さが露呈された。メンツを潰された日本の軍部、特に海軍は、米国の空母を撃滅すべくミッドウェイ海戦を計画、2ヶ月後の6月にこれを実行して大敗した。

### < 4 > 世界の都市空爆(無差別爆撃)

1. 錦州空爆---1931.10 満州事変勃発後、遼寧省の要衝である錦州市の市街地を関東軍の独立飛行隊が空爆した。リットン調査団が無差別爆撃だとして非難した。
2. ゲルニカ空爆---スペイン内戦中の1937.4.26 スペイン北部バスク地方の古都ゲルニカ市街を独伊合同のコンドル軍団が無差別空爆。市街の7割が瓦礫と化し、死者約2千。ピカソが「ゲルニカ」を描き、世界が知ることになった。
3. 南京渡洋空爆---1937.8 長崎県大村基地から延600機が出撃し空爆。これだけ長距離を飛べる爆撃機の出現に世界中が驚いたというが、これがB29の開発を早めたともいわれる。この空爆で日本はハーグ陸戦条約違反と非難されたが、日本軍はこの集中空爆後、12月には南京を占領し住民虐殺問題を起こすことになった。
4. 重慶爆撃---1938.12 蒋介石は首都を南京から重慶に移した。その後約2年半、日本陸・海

の空軍は占領した武漢から重慶市街地に無差別爆撃を行い、約1万人の死者が出た。蒋介石はこれを米国に訴え、米国は日本への輸出規制を強め、最終的には石油の全面的な輸出禁止を行い、日米開戦に至ったともいわれる。

5. ロンドン空爆---1940 夏からナチス独は、延べ爆撃機 1,400 機、戦闘機 1,000 機でロンドを中心に英国の都市空爆を実行した。死者約 5 万。しかし英空軍の反撃で空爆を止めざるを得なくなった。「バトル・オブ・ブリテン」という。
6. ドレスデン空爆---1945.2.13~2.15 の3日間、ドイツ東部の文化都市ドレスデンを、英・米空軍が無差別爆撃し、死者約 4 万。米・ソ連兵の捕虜も多数死亡した。

#### < 5 > 日米開戦時における国力比較

当時の政府の公表数字でも概算で日本 1 対米国 20 であることを認めていたが、国民には日露戦争でも国力の大差を克服して日本が勝ったことを力説した。

1. 日本を 1 とすると、米国は、国民総生産 12 倍、粗鋼生産 12 倍、石油備蓄 8 倍、石油精製能力 52 倍、石油生産高 520 倍(当時、米国は、世界の石油輸出国)。
2. 軍事力に限定すると---戦闘機は日本 5 千機、米 1 千機。戦艦は日本 10、米 17、空母は日本 10、米 8。(ほぼ互角、ヨーロッパに配備した米軍を除く。)

#### < 6 > 相手の本土攻撃用兵器に関する日米の違い

1. 米軍の兵器--- B29 戦略爆撃機、特殊ナバーム焼夷弾、原子爆弾

(1) B29 戦略爆撃機---スーパーフォートレス、「超空(チョウソラ)の要塞」ともいう。

長さ 30m、横幅 43m、時速 600 km、航続距離 6 千 km、爆弾搭載量 9 トン(日本の爆撃機は 1 トン)。1 万 m の高高度飛行が可能。ただし高高度からの爆撃は、日本上空の偏西風の影響で命中精度が低くこれが米軍の悩みだった。この B29 の製造に 30 億ドルを投資。原子爆弾製造に投資した 20 億ドルより多い。B29 による日本大規模空爆は単に軍事的な理由だけからではなく、30 億ドルも投資した以上その費用対効果を、米国陸軍は米国議会に対して実証する必要に迫られていたという実情もあったようである。

(2) 特殊ナバーム焼夷弾 --- その構造図 → 別添 (C)

この焼夷弾は、日本の木造家屋専用のナバーム焼夷弾で「M19(親弾)」とその中に「M69(子弾)」を 38 個収納した親子焼夷弾である。M19 は収束弾で上空 700m で内包していた 38 個の M69 を分散させる。この M69 は直径 8cm、長さ 50cm 程の六角形の筒状で重量は 2.7kg、ゼリー状の増粘剤を加えたナバーム弾で、燃えているリボンがついていて地上からも見え瓦屋根なら打ち抜く威力があり天井裏に転がって発火、皮膚に付着すると骨まで達し悶死する。3 月 10 日には M69 は約 40 万発投下され約 27 万戸の家屋が焼失した。この他に大火災発生用や時限性焼夷弾も投下された。

(3) 原子爆弾---記述を略す。

2. 日本軍の兵器---米国本土爆撃用に計画したものが「富嶽」と「風船爆弾」の 2 つである。

(1) 「富嶽」--- B29 の 3 倍の大きさを誇る巨大爆撃機だったが、試作機で終わった。

(2) 「風船爆弾」--- 実際に使用された。和紙をコンニャクで固めて直径 10m 程の巨大風船を

作り約 30 k g (前述のM19 焼夷弾 1 発程度か)の焼夷爆弾を積み、砂時計で自動計測しながら偏西風に乗せて米本土に向けて約 9 千発も飛ばした。9 割は太平洋に落下したが約 1 割がオレゴン州の森林に落ち 5 名が死亡し何箇所かに山火事を発生させたという。心理戦としての効果はあったようだが、1 発の製造に開発コストも含めて現在の価格で 1 千万円以上を投じ、自動計測の「砂時計」には当時の科学者の英知を集めたという。当時、女子学生も動員され、浅草国際劇場、有楽町の日本劇場等の大型施設において風船造りが行なわれた。子供の火遊びのような時代錯誤の兵器を真面目に造っていた事実には驚くばかりだが、この風船に細菌兵器を載せるのが狙いだったとも言われており、啞然とする。

#### < 7 > 日本の軍部の力の源

1. 統帥権--「統帥権」が軍の力の源だった。これは天皇のみが持つ国軍に対する命令権で、大日本帝国憲法に規定があり帝国議会や内閣は干渉出来ない。陸・海軍大臣は内閣に属するが、陸軍参謀本部、海軍軍令部は統帥権の許にあった。特に陸軍は「皇軍(天皇の軍隊)」と自称し、統帥権を楯に独断専行した。
2. 軍部大臣現役武官制度---内閣の陸・海軍大臣は現職の軍人でなければならない、という制度。このため内閣に不満ある場合、陸、海軍大臣が辞任し軍部が後任の現職軍人を入閣させないと内閣は制度上総辞職せざるを得ないので、軍の意向が配慮された。
3. 関東軍---当初は、南満州鉄道の守備隊だった(1906)。1919 に政府の管轄から「統帥権」の許にある陸軍参謀本部に移り、満州国建国(1932)を強引に進めた。このことが英米との緊張を一挙に高めた。関東軍は最大 70 万の兵と 600 機の飛行機を保有したが、太平洋戦線の拡大と共に順次東南アジアに転出したため、ソ連が講和条約を破って満州に侵攻した時(1945)には弱体していて、邦人数十万人を放置したという。敗戦で、兵士約 30 万もソ連の捕虜となりシベリアに抑留された。(注)「満州」は本来「満州民族」を指す言葉。「中国東北地方」を「満州」と呼ぶのは日本人が作った地図に「満州」と記載したのが最初だともいう。正式には『満州帝国』と呼び、清朝最後の皇帝「溥儀」が皇帝に就いたが敗戦で消滅。中国側は『偽満州』と呼んだ。
4. 「仮想敵国」という軍事思想 --- 作成中。

#### < 8 > 日米開戦前後の日本の思想、教育、マスコミ、民意(庶民感情)など

1. 思想---現人神、国体、八紘一宇、五族協和、大東亜共栄圏
  - (1) 現人神(アラヒトガミ)---人の姿を借りてこの世に現れた神の意。天皇の別称。

当時の国家的な行事に「新嘗祭(ニイナメサイ)」があった。天皇が神前で豊作を祈る神事であるが、当時私は「天皇陛下は、新嘗祭の時に新米を嘗(ナ)め、食事はこれだけで後は毎日じっと玉座に座っていて、時々は白馬に乗って観兵式に臨む人間の姿をした神様」だと信じていた。他の生徒も同じだった。先生がそう教えたのだと思う。だから天皇陛下がトイレに行くなどということは想像したこともなかった。知恵遅れの生徒が「天皇陛下は神様なのだから、燃やしても大丈夫か？」と質問をして、大問題になったという。
  - (2) 国体---日本は、神武天皇以来、天皇中心の家族国家で運命共同体であるという考え。

これを「皇統」といい、これを護ることを「国体護持」という。昭和15年(1940)が、初代神武天皇即位から2千6百年目ということで「紀元二千六百年式典」が全国で盛大に開催され、数日間、各地で提灯行列が続いた。だが、日本において現天皇制の源になる大和朝廷が成立したのは西暦紀元後であるから、神武天皇は神話の世界の人物である。しかし、戦前は国民学校において、この神武天皇は実在の人物とされ、それから昭和天皇に至まで124代の天皇の名前を暗唱させられた。私も必死に覚えたものである。

- (3) 八紘一宇(ハッコウ イチウ)---日本書紀にある神武天皇の「世界を一つの家にする」という宣言を基に、第2次近衛内閣が、天皇を盟主にして、東アジア諸国を大同団結させて「大東亜共栄圏」(後述)なるものを建設しようとした時に理念として使用した言葉である。
- (4) 五族協和---「満州帝国」建国(1932)のスローガン。満・漢・蒙・朝・日の5民族が協力して「王道楽土」を造ろうというもの。しかし実態は天皇を頂点とした「八紘一宇」をその最終理念としていた。
- (5) 大東亜共栄圏---中国・東南アジアにおける欧米の植民地支配を排除し天皇を頂点としたアジア民族共存共栄圏を建設するという構想。この言葉は古くからあったのではなく、開戦前、近衛内閣の時に初めて造られた言葉である。もともと満州進出の頃に、日本、支那、満州、朝鮮を纏めて「東亜」と呼んではいた。ところが1941年ナチスドイツがオランダ及びフランスを占領し、間もなくイギリスも敗北するだろうという見通しから、仏領インドシナ(ベトナム)、オランダ領インドネシア、英領ビルマ(ミャンマー)などの東南アジアを、日本の支配下に置くことが出来ると考えて「大」の字を冠して「大東亜」と名付けたに過ぎない。この構想の実態は、米国からの経済封鎖に対抗し「日本の戦略物資獲得のための排他的な勢力圏」の獲得が狙いだったといえる。

## 2. 教育勅語に基づく学校教育

- (1) 教育勅語(1890)--忠君愛国を説き教育の指導原理を示す勅語。天皇制崇拜が狙い。

全国の学校に「奉安殿」を置き「御真影(天皇・皇后の写真)」と「教育勅語の巻物」を「宝物」として安置し、行事ある都度「奉読式」を行った。国民学校の3年生にもなると「教育勅語」を暗唱出来るのは当たり前のことで、私は今でも暗唱出来る。戦後、「教育勅語」には「父母に孝に---」など家族の倫理的な理念が盛り込まれていて有益なので、これを否定すべきではないという論者もいる。しかし家族道徳の大切さを上から目線で説くこと自体がおかしい。私も親になって分かったことであるが、親は、我が子が健やかに育つことを願うだけであって親孝行をしてもらいために子供を産んだわけではない。

「教育勅語」の最大の問題点は「親孝行をすることが天皇陛下のためになること。」だという位置づけになっていること、即ち、親孝行は中間目標、天皇陛下に尽くすことが最終目的になっているのである。更に、「一旦緩急あらばご恩公に滅し--」、即ち「戦争になったら戦地に赴くのは臣民の勤めで、戦死をいとわず陛下に尽くすべし。」とまで述べている。普通の親は、親のために我が子に「死ね。」等とは言わない。ところが、教育勅語では、大親(天皇)は子(臣民)が死ぬことも求めていた、という矛盾した論理構造になっていた。

(2) 国民学校---日米開戦の年に「小学校」を改称して、戦時体制を支える「少国民」の育成を目指した。少国民達は先生から「兵士になることが最高の名誉だ。」と教わったが「兵士の本業は他国の人を殺すことである。」という教えは一切無かった。

(3) (尋常)師範学校---主に小学校教諭養成の学校。教育勅語に則って「少国民」を育てる役を担わせた。男性教諭の多くが出征したため、20歳前後の女性教諭が多く、純粹培養されたために狂信的な天皇崇拜者が多かった。

(4) 私の担任の先生---私が国民学校2年生の時の担任の女性の先生も師範学校卒の新人の先生だった。先生は、戦後になって『戦時中、子供達は天皇陛下の「赤子(セキシ)」(注)だと思って接していた。』とおっしゃっていたが、それだけの理由だけではなく心底から生徒を大切にしてくださり、私が最も尊敬する方である。だが、この先生は、神武天皇を実在の人物と信じておられたし、前述の「新嘗祭」や「親孝行は天皇陛下のため」の話もこの先生から伺ったものである。この先生とは戦後もお付き合いがあって、ご自身の戦時中の言動を悔やまれておられたのが、聴く私は辛かった。(数年前、ご逝去)。この先生を戦争協力者として裁けるのだろうか。私はこの先生を教化した尋常師範学校の教育の恐ろしさを感じる。(注) 赤子--「天皇陛下の赤子」と書く時は「アカゴ(赤ん坊)」でなく「セキシ」と読む。

「臣民は天皇の子供と同じ」という意味である。天皇の子供であるから大切に育てなくてはならない、というのは喩えとしては分からないでもないが、我が子であるはずの天皇の子が、死ぬかも知れない戦場に赴くのも天皇への忠誠であると説くのは矛盾している。

3. マスコミ --- 新聞、ラジオなどが、国民に対して戦意高揚を煽った。

(1) 新聞 --- 満州事変前までは政府や軍に対して冷静に態度をとっていたが、満州事変の頃から戦争を支持するように急変し、戦争拡大と共に販売部数が急激に伸びた。朝日、毎日(東京日日)、読売の3紙合計で、満州事変開始時400万部、支那事変開始時700万部、日米戦争開戦時800万部と発行部数を伸ばした。

各紙とも満州国建国を支持し「守もれ満蒙、帝国の生命線」等と煽った。

(2) ラジオ --- 1925放送開始。ナチス独の放送スタイルに倣い戦争遂行の先導役を務め、戦場の実況(?)放送や国民歌謡・軍歌の放送は、耳からの「麻薬」だった。

① 国民歌謡---1942年『子を頌(おも)う歌』→『太郎よ、おまえはよい子供、丈夫で大きく強くなれ。おまえが大きくなる頃は、日本も大きくなっている。太郎よ私を超えて行け!』。一般公募歌。国民学校の全国版校歌を狙ったといわれる。誕生日等でも歌ったものである。

② 文部省唱歌---『われは海の子。朝だ元気で(朝だ朝だよ〜)』等。

③ 軍歌---『敵は幾万(出陣学徒壮行会でも演奏)』『麦と兵隊(徐州、徐州と〜)』

『出征兵士を送る歌(我が大君に召されたる〜)』『若鷲の歌(若い血潮の〜)』

『同期の桜(貴様と俺とは〜)』『愛国行進曲(見よ東海の〜)』など。

(3) 映画や紙芝居

4. 当時の外国人に対する庶民感情

(1) 中国人に対して --- 支那進出の目的は「軍閥・匪賊を討伐し苦しんでいる支那の民衆を

救うこと」であると教えられた。即ち「戦争」では無く「匪賊の討伐」であると教え込まれた。その一方で、日常生活でも、中国人を「チャンコロ」と侮蔑していた。

(2) アメリカ人に対して --- 開戦の少し前迄は、庶民の対米感情は必ずしも悪くなかった。

むしろアメリカ文化に対する憧憬さえあった。それなのに、日中戦争が長引くと、背後に米国がいるとして「鬼畜」と叫ぶようになった。

5. 「隣組」 --- 1940年10月、第2次近衛内閣の時、全ての政党を解党し近衛首相を総裁とした全国民組織(非政党)の『大政翼賛会』が結成され「隣組」はその末端組織。隣近所10軒程度で1つの隣組を構成した。強制加入で食糧の配給や消火訓練を始め生活の隅々までコントロールした。『贅沢は敵だ!』『欲しがりません、勝つまでは!』が「合い言葉」(標語)だった。

(a) ところで、隣組の例会などでの発言は、形式的には極めて平等だったのである。我が家で会合がある時は少年の私も陪席したが、例えば戦局のラジオ放送を聴く時など、皆が競って発言した。それはあたかも新興宗教の会合における信仰告白のようだった。発言しないと「非国民」だと見做されるような暗黙の同調圧力があったことを皆は肌で感じていたのである。

(b) 一方、発言は自由だと言っても戦争を批判するような発言をしたら通報されることは誰でも分かっていた。隣組は「非国民」を出さないための監視装置でもあった。

(c) そして全員がしゃべり終わると、組長が、例えば戦時国債購入の割り当てなどを提案し、大筋はそれで決まった。組長は、事前に上部組織である「町内会」の実力者(戦時中になると、大抵は在郷軍人会の役員が兼務)と割当額を話し合ってから提案をする習わしで、参加者は皆、暗黙のうちにそのことを承知していた。

(d) 戦後、知識人などの中に『自分は戦争に反対だったので、戦時中は沈黙していた。』と発言する人物が何人もいたが、「沈黙していた。」というのは「嘘」である。何故なら病人でもない限り隣組の例会に出席しないと食糧の配給が受けられなかったし、出席しても発言しないと変人扱いされるだけでは済まないで「非国民」にされかねなかった。だから『戦時中は黙っていた。』ということはある得なかった。「黙ること」は許されなかったのである。

#### < 9 > この戦争の死者数

1. 軍人・軍属約230万、外地の民間人約30万、空爆死約50万、合計約310万人の日本人が死亡している。その大半は東京大空襲から敗戦までの半年間の死者で、東京大空襲後も「一撃後、和平」などと抗戦を唱えた指導者達の責任は重い。この半年で死亡した人の内訳は、

(1) 約60万人は、沖縄を含め日本本土における非戦闘員(民間人)である。

(2) 海外での軍人戦死者約百数十万人のうち、多くは、戦闘では無く、疫病、餓死、輸送船撃沈溺死であった。なんと餓死は推定約60万人ともいわれている。日本人兵士の死者の大半が、戦闘での死者でなかったことは特筆すべきことである。その大きな理由は、日本軍が兵站(補給)を軽視したためである。

(3) 「学徒出陣」で戦場に送られた学生は約6万人、その約1割が戦死した。

2. 硫黄島が陥落した1945年2月、敗戦必至として、ソ連を介して和平交渉をすべきとの「近衛上奏文(即時和平論)」が天皇に提出された。もしこの時点で敗戦交渉が行われていたなら

ば、310万人の死者の大半は死なずに済んだと思われる。従って、この時点になっても「即時和平」でなく「一撃戦果を挙げてから、後に和平」に固執した為政者の責任は、特に重いと云わざるを得ない。「一撃戦果を挙げてから---」の「一撃」とは、「沖繩戦」を指すのだが、そこまで戦争継続に固執した責任者を、今後も糾弾しないことには、死者は浮かばれない。

3. 上記とは別に、日本軍が、中国大陸や東南アジアなどで、数百万人以上の非戦闘員を殺害した加害者責任も忘れてはならない。（注）この観点から、この戦争を「アジア太平洋戦争」あるいは「日中・太平洋戦争」と呼ぶのが相応しいと思う。

<10> ポツダム宣言を受託しなかったら？ → 本土決戦！

1. アメリカ軍の日本本土上陸作戦--- ダウン・フォール作戦といい、次の2つの作戦を指す。

(a) オリンピック作戦（南九州上陸作戦、1945. 9. 1. 予定）

(b) コロネット作戦（相模湾及び九十九里浜上陸作戦、1946.3. 1. 予定）

コロネットは馬蹄形の女王の王冠のこと。

2. 日本側の対応策

東京大空襲後、6月に少年兵を含む300万人の民兵を編成する『義勇兵役法』を制定した。一億玉砕戦法の始まりである。本土防衛司令官は『300万国民義勇隊が肉弾戦を展開すれば米兵も恐れをなし和平を求めてくる。そうすれば「皇統」は護られる。』と豪語していた。だが、この発言と作戦計画には、次のような大問題がある。

(1) この発言は、「皇統」（現人神である天皇の親政）が護られるならば、300万人の臣民（国民）の犠牲（場合によっては1億玉砕！）はやむを得ない、という為政者側の判断を示したもので、結局のところ、国民の利益よりも皇室の存続を優先させることを宣言したことになる。しかし、それほどまでにして護ろうとした「皇統」なるものも、戦後、昭和天皇の「人間宣言」により「フィクション」であることが露呈している。

(2) 「義勇兵役法」は、アマチュアの民兵（庶民、非軍人）を先ず戦わせ、時間と金を掛けて育てたプロの軍隊を内陸部に温存させる方式のもので、国民を護るはずの軍隊が、先ず一般国民を使い捨てにするとする日本の軍隊の本質を露呈したものと見える。

<11> 日本が戦争を始めた根底にあったものは何か？

1. 経済的背景---人口急増、不況と貧困、資源不足

(1) 人口急増---1870年(明治初期) 3,500万、1920年(関東大震災の前) 5,600万、1930年(満州事変前) 6,500万、1940年(太平洋戦争前) 7,200万人。

(2) 不況と貧困---関東大震災(1923)及びそれに続く昭和恐慌で東北地方の小作農民が大打撃を受け失業者は約3百万人を超え、「5百万人満州移民計画」が叫ばれた。東京にも約5万人の「細民」が居て多くは「乞食」を職業としていた。

2. 資源不足---石油、鉄鉱石、ゴム等の資源のほとんどは米国から輸入していた。

中国戦場が拡大するにつれて、戦争資源（鉄鉱石、石油など）を敵対国の米国から輸入する割合が増加するという矛盾した展開になっていた。（当時、米国は戦争当事国には戦争資源を輸出しないことになっていたが、日本も中国国民政府も戦争宣言をしていなかったため、米

国は両方に輸出していた。) 従って、日本は、オランダ領スマトラ島等の石油資源獲得が必須の命題になっていたし、中国派遣軍の食糧も外米(ベトナムのお米など)に頼るようになった。

### 3. 思想的背景

#### (1) 天皇制国家主義思想

#### (2) 黄色人種差別に対する反発? --- 戦前、黄色人種に対する反発が強かったなどという

一方、いいかげんなもので、日独防共協定締結後、今度は、大和民族とゲルマン民族が優秀だという話に政府の態度が変わった。1938年(昭和13年)の夏に、白色人種であるヒトラー・ユーゲント(ヒトラー・ナチス党の下部青少年組織)の30名が横浜港に降りて神戸港から去るまでの3ヶ月間、政府主導で日本各地においてアイドル並みの大歓迎を受けた。

<12> 何故この戦争の勃発を防げなかったのか? → 作成中。

<13> 何故敗戦が確実となった時点でも戦争を止めることが出来なかったのか? → 作成中。

<14> 敗戦の日はいつか

国際法的には、日本が降伏文書に調印した1945年9月2日が「敗戦の日」である。

日本では、昭和天皇がポツダム宣言を受託した旨のラジオ放送(玉音放送)を行った8月15日を「終戦の日」としているが、これは国内向けの話である。

<15> 戦争責任--- (その1)「為政者」の責任 → 作成中。

<16> 戦争責任--- (その2)「一般国民」の責任

天皇、軍、政府、官僚、マスコミなどの戦争責任については、多くの研究がある。

だがこれらの責任問題は、いわば「一般国民(庶民)」の外側の組織の問題である。

ここでは「一般国民(庶民)」の側、即ち「民意」の戦争責任について考えてみたい。

1. 日米開戦の直前、和平交渉を打診する近衛文麿に対して、東條英機が『近衛さんがラジオで散々「民意」を煽りながら、いまさら和平と言われても「民意」が許しませんよ。』と切り捨てたという逸話がある。確かに満州事変の頃から、「民意」即ち「一般国民(庶民)」が戦争推進の大きな役目を務めるようになったことは間違いないと思う。しかし、これだと一般庶民が「自らの意志」で戦争推進の旗振りをやったような誤解を招くし、「一億総懺悔説」に繋がりがねない。
2. その点に着目して、10年ほど前に『「民意」とは一部の「投書階級(投書族)」のことである』と指摘する研究が表れた。戦時中のことを多少知る者からみると、この指摘は誠に鋭いもので、庶民の中に「投書族」が相当数居たことは間違いない。何故なら、私の父も「投書族」の1人だったからである。当時の政府やマスコミは「投書族」の「投書」を「民意」として上手に利用していたのである。
3. 私がここで問題にしたいのは、「投書族」即ち「投書」の多くは『やらせ』だったということで、先の「投書階級」の研究ではこの点が曖昧だったような気がする。
4. この『やらせ』を主導した組織として「帝国在郷軍人会」を挙げたい。  
もともと「帝国在郷軍人会」(約3百万人)は退役軍人の私的な扶助組織であった。それが1936(昭和11年)の法律で陸海軍の下部組織になっていたため、この組織が行ったことは軍部

の責任の一部といえなくもない。しかしこの組織は、普段は庶民の顔をしていて、いざという時は軍の顔をした、虎の意を借る狐の役を果たしたのである。特に戦時体制になると在郷軍人会の幹部は一般国民(庶民)の組織の中に入ってきて、羊を誘導する犬の役を果たした。即ち、この幹部達は、(a) 全国的な規模で「隣組」の上部組織である「町内会」や「部落会」で要職に就き、(b) 軍から巨額の宣伝費(機密費、裏金)をもらって、(c) 隣組の指導、戦勝祈念の神社参拝、祝祭日の行事や提灯行列への参加、学校での軍事教練や各地の青年団の指導、消防訓練、国旗の無料配布、戦時国債の購入、組織的な戦意高揚の投書などの推進を図り、「非国民」の監視、日々の服装の点検に至るまで仕切った。その意向に逆らえば「非国民！」と罵倒された。(d) その幹部のほとんどは、日露戦争の頃少年で戦場体験が無い世代だったので、現役の時は軍の高官であったとしても後輩である現役の出征兵士に対するコンプレックスの裏返しとして誰よりも好戦的で戦争を美化していた。彼らの話といえば日露戦争の肉弾戦の話で、まるで自分が戦っていたかのように話したので子供達は血湧き肉躍る思いで聴き入っていたが、日常生活では「隣の初老のおじいさん」だった。(e) その妻達は「大日本婦人会」(約2千万人)を仕切った。(f) 在郷軍人は、現役の軍人から見れば、同窓会の先輩なのでそれなりに敬意を払っていた。

5. 「在郷軍人会」は莫大な資金で酒や煙草を購入し、行事の参加者に配っていた。

そのため、満州事変の頃から、父の店でも酒や煙草の最大のお客様になっていた。

当時、酒税と煙草税は国税の中でも大きな比重を占めていた。今では想像もつかないであろうが、日露戦争の頃には酒税だけで国税の約4割占めていて、日中戦争が始まる頃迄は酒税・煙草税が国税の5割近くを占めていたのである(所得税よりも多かった。なおここでは戦時国債については触れない)。当時、庶民にとっては、酒・煙草は贅沢品で「酒を飲むことは税金を納めることと同じ。」という思いがあった。それ故に、おかしい話だが、戦時中、酒を飲み煙草を吸うことは「お国のため！」でもあった。国家財政の見地から言えば、軍部から巨額の軍事機密費(裏金である)を在郷軍人会は受け取り、そのお金で酒や煙草を大量に酒・煙草商から買い、それを配って戦意高揚の工作費に使い、結果的には、国税の増収になる、という合理的なお金の流れがあったのである。従って町内における酒屋や煙草屋の社会的な地位も高く、行政機関だけでなく、いろいろな圧力団体からの「ご用承り機関」でもあった。

このことを知らないと、軍部→在郷軍人会→酒商組合→一般国民(庶民)の流れは理解出来ないと思う。父が母に語ったことではあるが、在郷軍人会のお偉いさんが『海軍が戦艦を何隻も造るのに較べたら、陸軍の「戦意高揚費」など安いものだ。』と酒組合の席で話していたという。とにかく在郷軍人会との会食が多かったという。

6. 父は「在郷軍人会」の支部の幹部とも仲が良く、投書を頼まれると喜んでこれに応じ、酒・煙草組合の役員でもあったので組合にも諮り、投書する人を決めて協力した。全国各地の酒や煙草の組合でも同じようなことが行われていたという。

7. 日米開戦直前に、首相官邸に届いた市民の投書約3千通の殆どが「米国に宣戦布告せよ！」だったという。だが、この投書も在郷軍人会が割当てを決めて投書をさせたものが多いはずで、

私の父もその割当てられた投書者の 1 人だった。父は『家のため商売のため役に立つことが、お国のためにも役立つのだ。』と語ってくれた。

8. 「投書」以外の例としては、「紙芝居屋さん」が使う「絵」の話がある。

当時、久留島武彦という童話作家がいて、日本のアンデルセンとも言われたが、父はその弟子の 1 人で、我が家の隣にあった銭湯の「松葉湯」が休みの日などにはその広い脱衣所を借りて、ボランティアで近所の子供達を集めて久留島先生の童話の「語り」や昔話の「紙芝居」をやってご褒美に飴などを配るのを楽しみにしていた。ところが、日米開戦の頃から「紙芝居」の「絵」や駄菓子は、ほとんど在郷軍人会が用意してくれるようになったという。駄菓子の入手が難しくなっていたのでタダで甘い駄菓子等を寄附してもらえたのはありがたかったという。

当時は、東京の下町を中心に子供相手の職業として「紙芝居屋さん」という商売があった。自転車に紙芝居を載せてでやってきて、子供達に紙芝居を見せて駄菓子を買った。子供の楽しみでもあった。父の話によれば、この紙芝居屋さんの「絵」の多くが、在郷軍人会が父に貸してくれた「絵」と同じものになったという。在郷軍人会が「子供向け戦争物紙芝居」を作り、何百人という紙芝居屋さんに無料で貸すようになり、紙芝居屋さんは「絵」の仕入れがタダになったが、在郷軍人会の「裏金」で、子供の戦意高揚に一役買っていたのである。

9. 父が、自らの沸き起こる意志で、自発的に「投書」をしたとか「戦争物の紙芝居」を子供達に見せたとは考えにくい、この私の父は「共犯者」だったのだろうか。

いずれにせよ「羊(庶民)を束ねる犬」の役割を務めたいた「帝国在郷軍人会」という巨大組織があったことは記憶しておくべきであるし、現在もこのような組織があり得るので監視すべきである。

10. 敗戦直後の約 2 ヶ月間、東久邇宮内閣が成立し「国民総懺悔」説を唱えた。この戦争の責任は一般国民にもあるとする説である。だが、この説では、国民の責任を問う前に、天皇の親戚といって良い「旧宮家」「五摂家」「華族」などと呼ばれる特権階級があって、その人達には極めて重大な戦争責任があったことを隠蔽している。五摂家の 1 人である近衛文麿は、戦犯として逮捕される前に自殺したが、大元帥(天皇)に次ぐ陸軍参謀本部長は伏見宮で、海軍軍令部総長は閑院宮であった。彼らは単なる飾り物ではなく大きな軍事作戦の決定には積極的に関与し、天皇に上奏する前の最終決定権を握っていたのである。しかし、この 2 人は戦犯に問われていない。この 2 人を戦犯で起訴すると天皇にも類が及ぶという忖度が働いたようである。

そのほかの旧宮家や華族の多くが陸海軍の要職に就いていたのである。しかもほとんどが戦場ではなく国内の安全な部署に配置されていた。戦後、このことを指摘する学者は少ない。

(付) 当時、同じような役割を担った組織に、「神社本庁」(神道系約 8 万神社の組織)や「生長の家」(宗教団体)などがあったが、ここでは割愛する。

<17> この戦争に関するその他の問題

1. 戦争裁判---東京裁判 → 作成中。
2. 靖国問題 → 作成中。
3. 歴史修正主義の問題 → 作成中。

4. 戦後補償 → 作成中。

5. この戦争の名称

日米開戦時、政府は「支那事変を含め、この戦争を『大東亜戦争』と呼ぶ。」と宣言したが戦後、占領軍がこの名称を廃止して「太平洋戦争」と呼ぶことになった。満州事変を含めて「十五年戦争」と呼ぶ論者もいるが、現在は「アジア太平洋戦争」と呼ぶのが通説である。

6. この戦争の性格についての諸説 --- 複合的な戦争であったことが分かる。

(1) 人種差別に対する戦争---特に白色人種の黄色人種に対する戦争

(2) ヨーロッパ帝国主義国家のアジア植民地支配に対する解放戦争

(3) 国益維持のための自衛戦争

(4) 中国を始めアジア諸国民に対する侵略戦争、一方、欧米に対しては帝国主義国家同士のアジア市場を巡る覇権戦争

(5) ソ連に対しては、ソ連からの侵略に対する自衛戦争

7. 日本が行った戦争の特質

(1) 日清戦争から敗戦迄 50 年間のうち、49 年間は海外戦争で最期の半年が国内戦。

(2) 戦争資源は殆ど輸入、しかも米国頼み。→ 戦争は奇襲による短期決戦しかない。

(3) 兵站(補給)を軽視(現地調達主義)

(4) 精神主義---元々日本人は「大和魂」などの精神主義を重視していたし、日露戦争において国力が 10 倍以上もあるロシア帝国に勝利したこと及び戦争の物的資源に乏しいことなどが精神主義を強調せざるを得なかった原因である。

<18> この戦争から学ぶもの

1. 戦争は『お互いに何の恨みもない人間を殺し合う最大の罪悪である。』ことを、若者達に徹底的に教育すべきである。このような教育は戦前には無かった。

2. 戦争の最大の被害者である「死者達」なら何を語るであろうかを念頭に置いて、「生者」は発言すべきである。死者達は『自分が殺されたことも、今は生きている自分の妻や子供達がこれから戦争で殺されることになるのも仕方が無い。国家のためなら、これからも家族が殺されるとしても仕方が無い!』などと言うのだろうか。

3. 「310 万人の死者達」が残してくれたものが「日本国憲法」であって、その遺言とも言うべきものが「戦争放棄」だと思う。ところで、この「憲法」は占領軍に押しつけられたものであるという論者もいるが、では、仮に「押しつけられた憲法」だとした場合、この憲法の「戦争放棄」と並ぶ基本原則である「国民主権」や「基本的人権の尊重」も押しつけられたものとして返上すべきなのだろうか。

4. 「国の自衛力」とは何か---「自衛力」とは「国防力(軍事力)」だけではないことを認識すべきである。即ち「自衛力」とは、「食糧の自給・確保」、「医療の充実・感染症対策」、「社会保障の充実」、「雇用維持」、「少子高齢化対策」、「教育の充実」、「地震災害対策」、「インフラの整備(交通網、電気、水道など)」、「エネルギー供給の確保」などの「国民全体の生活の維持力」や「新技術の開発・産業の振興」、「貿易の振興」、「外交力を含めた国際的な平和貢献」

などの「様々な国力」に「国防力(軍事力)」が加わったものである。これらのバランスの中で「国防力」を吟味すべきである。

5. 「国の自衛のため！」の戦争の欺瞞---この戦争は、天皇の宣戦詔書にもあるように『自存自衛ノ為』と称して始まったが、およそ全ての戦争は侵略戦争であっても「国の自衛のため！」と称して始まる。だから、「お国のため！」や「愛国」を叫ぶ政治家やマスコミの言動に対しては日頃から監視することが重要である。彼らが唱える「国の自衛のため！」が何であるかを吟味する必要がある。
6. 戦争が始まれば、殺し合うのは国民(市民)同士であって権力の中枢に居る人達では無いことを、この戦争は教えてくれた。
7. ご子息を戦争で喪ったあの「おばさん」の発言にもあるように、戦争で身内に死者が出ると「恨みの連鎖」で終わりが見えなくなる。これも戦争の恐ろしさである。なお、戦意高揚に一役買っていた私の父の最後の言葉は『子供達に逢いたい！』だったという。  
(付)『ヤマトダマシニ(大和魂に)ダマサレテ私の息子は死にました。天(天皇)に向かって唾吐くも我が身に落ちるウラメシヤ(恨めしや)』と漏らした老婦人がいた。
8. この戦争の教訓として『国力が強い国とは決して戦わないこと(国力が劣る国とは戦う必要も無い)』及び『同盟国もいざという時には頼りにならないこと』が学べる。  
そうであるなら、この戦争からは『非戦・避戦論』の大切さを学ぶべきである。
9. 『日米開戦は、あと数ヶ月、日本側が態度を保留していたら(ナチス独が負け戦になって、その結果)、回避出来たであろう。』という戦後の知見にも学ぶべきである。  
自衛力の強化論も必要だろうが、何よりも『戦争だけは起こさせないという粘り強い外交交渉』が重要で『結論先伸ばし戦略』も時には必要だという教訓でもある。
10. 戦争になった時、①日本は戦争資源のほとんどを輸入に頼らざるを得ないので、長期戦は戦えない。②また、攻撃を受けた時、狭い国土の中で都市部に人口が密集し過ぎているし、原子炉などの施設も攻撃されやすい海岸部に集中している。  
これらの理由を挙げるだけでも戦争になったら日本が滅亡するのはまず間違いない。だから、台湾有事とか朝鮮半島有事が起きても、日本が絶対に戦争に巻き込まれないように全力を尽くすしか選択肢はないのである。
11. 上記のようなことを知りながら、そして『困ったことになりそうだ。』と心で思いながら、何もしていないでいる私(市民)が居るとしたら、そこにこそ最大の問題がある。

#### <19> 戦争を中心にした日本近代史

1. 19世紀は欧米の帝国主義国家がアジアやアフリカで植民地を争奪する時代だった。
2. 明治維新～日露戦争(1868～1905)
  - (1) 日本は、薩英戦争(1866)などや戊辰戦争(内戦)を克服して明治維新を達成した。  
明治政府成立(1868)後、独立国家として中央集権国家を目指し 1900年に大日本帝国憲法が施行され、僅か20年ほどで「大日本帝国」として世界史に登場した。
  - (2) 日清戦争(1894～95) --- 李氏朝鮮で、排日・排洋の「甲午農民戦争(東学の乱)」(1894)が

起こり、日本と清が出兵し衝突、日清戦争に発展、日本軍が勝つ。日本の死者1万7千。下関条約で賠償金約3億円を得、台湾、澎湖諸島、遼東半島が日本領となる。直後に露・独・仏による「三国干渉」があり遼東半島は清に返還。一方、この巨額の賠償金で1900年頃から軍需産業中心の第2次産業革命が始まった。

(3) 日露戦争(1904~05)---「三国干渉」後、露国は清から旅順港や東清鉄道を租借。

満州と朝鮮での利権対立で日本と一触即発の状況。当時の国力差は日本1、露10。軍隊は日本20万、露は150万と大差だったが、日本軍は露艦隊などを奇襲し宣戦布告。旅順港占領、日本海海戦などで勝利。しかし戦争継続能力は限界。ロシア側も「第一次ロシア革命(血の日曜日)(1905)」が勃発して国内が混乱。セオドア・ローズベルトの斡旋でポーツマス講和を結び、日本は遼東半島南部の租借、東清鉄道の割譲などを得たが、損害も大きく軍の死者9万、戦傷病者44万。戦費は20億円(当時の国家予算4億円の5倍)と巨額だった。

(4) 1906年南満州鉄道(満鉄)を設立---万里の長城の南端の「山海関」から東の地域は「関東」と呼ばれていたが、日本は、特に遼東半島南部の租借地を「関東州」と名付け南満州鉄道(満鉄)(国策会社)を設立、旅順港、大連から東清鉄道周辺の炭鉱、産業を経営させ、これの警備のために軍を置いた。これが後の「関東軍」である。

3. 大正時代(1912~1926)、第一次世界大戦(1914~1918)

(1) 日露戦争後は自由主義的な大衆社会を迎え「大正デモクラシー」と呼ばれた。

(2) 1914年に第一次世界大戦(~1918)が勃発(米は途中から参戦)、日本も日英同盟(1902)により参戦し、独国が租借していた山東半島南部膠州湾の青島及び独領の南洋諸島を占領した。戦勝国となった日本は、大戦後設立された国際連盟(米国は加盟せず)の常任理事国となり、独領だった南洋諸島は日本が国際連盟から委任され委任統治することになった。日本の損害は殆ど無く債務国から債権国になり、世界の列強の一つになった。(注)この大戦で、ドイツ帝国、ロシア帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、トルコ帝国が滅亡し、世界中で民族独立運動が勃発した。

4. 関東大震災(1923)及びその後

1923年9月1日、関東大震災が発生。東京の下町及び横浜などが壊滅。死者・行方不明14万人。被害55億円。当時の国富690億円(土地を除く)の約8%を失った。これが戦争の遠因の一つになったとも言われている。

(1) 関東大震災後は「震災恐慌」となり翌1927には「金融恐慌」次に1929の「世界恐慌」で生糸が暴落したことを引き金に企業倒産続出し1930の「経済恐慌」を招いた。続いて米の豊作で米価暴落した後に東北で凶作大飢饉が続き、1931に「農業恐慌」が発生した。相次ぐ恐慌で失業者が約300万人に及んだ。

(2) この結果、第1次大戦(大正3~8)後の軍縮による軍人への蔑視風潮や自由主義的な風潮は影を潜め、「個人主義」から「愛国的一致団結主義」の風潮(世論)に傾いた。失業対策として『500万人満州移民計画』が新聞などで喧伝され、庶民の間でも満州進出の尖兵としての「軍」に期待が寄せられるようになった。

5. 満州事変以降(1931～)---(注) 満州事変以降を「15年戦争」と呼ぶことがある。
- (1) 1931.9. 関東軍が、奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道を爆破し、これを中国軍の行為として攻撃し「満州事変(戦争)」が勃発、満州の大半を武力で制圧した。ここまで進出すると日本の自衛の域を超えると懸念して「満州帝国」を建国した(1932)。国際連盟は建国を認めず、常任理事国だった日本は国際連盟を脱退した(1934)。
- (2) 1931の農村不況以降、貧民救済を掲げる「国家社会主義思想」が広がり、1936.2「二・二六事件」が起きた。この時、天皇が鎮圧を命じたことにより、天皇の権威(神聖)が更に高まり、統帥権を楯にした軍の独裁に歯止めがかからなくなった。
- (3) 1937.7 北京郊外の盧溝橋で日中が軍事衝突し「支那事変(日中戦争)」が勃発。政府は当初不拡大方針を示したが、統帥権を楯にした関東軍が独走した。次いで、1939.5 ソ連とは満蒙国境でノモンハン事件(戦争)を起こし、日本軍は大敗。
- (付) 日本政府が「満州事変」「支那事変」を「戦争」と呼ばなかったのは、プーチンが「ウクライナ戦争」を「特別軍事作戦」と呼んだのと同じ手法である。
6. 大東亜戦争(太平洋戦争)(1941)勃発から東京大空襲(1945)まで
- (1) 1941年12月8日、日本海軍がハワイの真珠湾を奇襲。しかしその約1時間前、陸軍も宣戦布告無しに英領マレー半島コタバルに奇襲上陸していた。(付) この戦争を、『宣戦の証書』では『自存自衛ノ為---』と宣言し、東条内閣は『支那事変を含めて太平洋戦争と呼ぶ。』と定義した。
- (2) 仏領インドシナ(ベトナム、カンボジア、ラオス)は、この開戦より前に仏国(フランス)がナチス協力政権となったため、日本と仏国との共同統治になっていた。
- (3) 日本軍は、開戦から僅か4ヶ月後の1942年4月迄には、油田地帯のオランダ領スマトラ島パレンバンなどを次々と占領し、東南アジア各地の拠点を支配した。
- (4) ところが、その2ヶ月後の6月にミッドウェイ海戦で大敗した後は、連敗となった。1944年7月にマリアナ諸島のサイパン島が陥落した。その結果、B29の日本本土までの往復飛行が可能になり、その11月から本格的な本土空爆が始まって、翌1945年3月10日の『東京大空襲』に繋がるのである。同年8月に敗戦。
7. 上記を振り返ってみると、明治維新の頃から敗戦に至までの約80年間は、日本は、薩英戦争(1866)、戊辰戦争(1868)、西南戦争(1877)、日清戦争(1894)、日露戦争(1904)、第1次世界大戦(1914)、シベリア出兵(1918)、満州事変(1931)、支那事変(1937)、太平洋戦争(1941)と、内戦を含めてほとんど10年刻みに戦争を行った「戦争の80年間」であった。
- これに対して、敗戦から今日までの約80年間、日本は、朝鮮戦争やベトナム戦争などで兵站基地の役割を担ったりはしたが、世界の戦争や内戦に直接関わったことはなかった。
- 即ち、この80年間は、近現代の世界史的にみても、まれにみる「平和の80年」であったといって差し支えない。私達は、この事実を再確認して今後に生かすべきだと思う。
- <20> 「日本」の良さと弱点を知ろう。
1. 日本の良さ---敗戦から80年、日本は平和を維持し、次のような世界に誇れる素晴らしい

国になったことを、先ず認識すべきである。この中には古来からのものもあるが、戦後獲得したものが多いたことを、この戦争で逝去された 310 万人の死者の霊に報告すべきであろう。310 万人の霊によって獲得したものも多いからである。

(1) 大日本帝国憲法から日本国憲法にかわり、①主権在民、②基本的人権の擁護、③戦争放棄が確立した。

(2) 言論の自由が保障され、民主的な政治体制になった。

(3) 戦争放棄のお蔭で、戦後、80 年にもわたり戦争のない国になった。

(4) 世界一の長寿国になった。優れた健康保険制度。医療施設の充実。

(注) 戦時中の平均寿命は約 50 歳だった。

(5) 国民が保有している個人資産は世界でもトップクラスである。

(6) 経済大国、貿易大国である。

(7) 治安が良い。

(8) 貧富の差が少ない。

(9) インフラ網が充実している。---交通、電気、水道、ゴミ処理など。

(10) 義務教育が行き届いていてその水準も高い---民度が高い。

2024 年の「国際成人力調査」では、世界第 2 位であった。

(11) 人種差別がほとんどないし、宗教にも寛大。一般国民の間に大きな分断がない。

(12) 東日本大震災の時にも見られたように、災害時でも、協力して事に当たる国民性がある。

(13) 日本語という共通言語でほとんどの国民が意思疎通できる。

(14) 国破れても山河ありで、自然環境に恵まれている。

① 山や海に恵まれ四季の変化を享受出来る。熱帯、寒冷地帯、砂漠地帯、山岳地帯などの住民とは異なり、生活しやすい。

② 観光資源にも恵まれている。

(15) 人種を問わず、世界中の多くの人が日本に住みたがっている。

(16) 功罪はあるが、軍事大国である。

## 2. 日本の弱点

(1) 日米地域協定があり、完全な独立国とは言えない。

(2) 国債の借入金が 1 千兆円もある。ほとんどは国内の金融機関(個人預金)が購入しているので国民の資産であるともいえるが、金利負担の問題がある。

インフレになれば評価額が減るので、国の利益になるが、その分、国民が不利益を被る。

(3) 地震や自然災害が多い。---南海トラフ地震や関東直下型地震が懸念される。

(4) 少子高齢化が急速に進んである。

(5) エネルギー・原料、食糧など多くの資源を外国に頼らざるを得ない。

(6) 原発事故の後処理及び再発防止という負の遺産を抱えている。

3. 地球規模の問題点 (1) 気候温暖化 (2) 世界的な人口増加と食糧難 (3) 地域的な貧富の格差拡大 (4) 核による軍拡競争の懸念 (5) 地域紛争の拡大

<21> 戦争を中心にした日本近・現代史の「年表」

- 1840.アヘン戦争 1866.薩英戦争  
1868.戊辰戦争 9.明治維新  
1869.版籍奉還 1871.廃藩置県 1873.地租改正、徴兵令  
1877.西南戦争 1883.鹿鳴館時代  
1889.帝国憲法発布  
1894.～1895 日清戦争 1902.日英同盟締結  
1904～1905.日露戦争  
1911.(大正元年)～大正デモクラシー(軍人に対する侮蔑の市民感情)  
1914.～1918.第1次世界大戦。日本は国際連盟の常任理事国となる。戦時好景気  
1915.1.対華二十一ヶ条の要求 1918.シベリア出兵。8.米騒動  
1923.(大正12) 9.1. 関東大震災。その後、震災恐慌  
1924.5.米国、排日移民法  
1925.ラジオ放送開始、普通選挙法公布、治安維持法施行  
1926.12.昭和元年：昭和天皇即位 1927.3.金融恐慌。5.第1次山東出兵  
1928.2.初の普通選挙。6. 改正治安維持法。パリ不戦条約  
1929.10.世界大恐慌。金解禁声明。  
1930.4.ロンドン海軍軍縮会議(統帥権干犯問題)。  
1931.昭和恐慌 9.満州事変勃発 11.中華ソビエト共和国臨時政府  
1932.3.満州国建国、リットン調査団 5.五・一五事件。  
1933.3.国際連盟脱退  
1934.8.ヒットラー総統誕生  
1935.2.天皇機関説問題 8.第1次国体明徴運動(天皇親政が国体の本義)  
1936.2.二・二六事件 8.ベルリンオリンピック。12.西安事件(第1次国共合作)  
1937.4.国家総動員法。7.盧溝橋事件、支那事変(日中戦争)勃発。12.南京占領  
1938.1.国民政府を相手にせず、国家総動員法、東亜新秩序声明。重慶無差別爆撃  
1939.5.ノモンハン事件、独ソ不可侵条約 9.第二次世界大戦勃発。  
1940.6.ナチス独がパリ占領 9.日独伊三国同盟、日本:北部仏印進駐 10.大政翼賛会  
1941.4.国民学校令 4.日ソ中立条約 5.独:英本土空爆 6.独ソ戦勃発  
7.関東軍特別演習(対ソ戦準備)  
12.8 太平洋戦争勃発(マレー半島コタバル奇襲上陸、ハワイ真珠湾奇襲攻撃)  
1942.日本軍、東南アジア各地占領 4.ドゥリットル日本空爆 6.ミッドウェイ海戦  
1943.2.ガダルカナル撤退 10.21 出征学徒出陣壮行大会  
1944.1.インパール作戦 6.連合軍ノルマンディ上陸 7.サイパン守備隊全滅  
8.学童疎開 10.レイテ沖海戦(神風特別攻撃隊)  
1945.2.近衛上奏文(ソ連を介し和平交渉) 2.硫黄島守備隊全滅 3.10 東京大空襲

5.ドイツ無条件降伏 6.「義勇兵役法」 6.23 沖縄戦全滅  
7.26 ポツダム宣言通告 8.6 広島原爆 8.8 ソ連参戦 8.9 長崎原爆。  
8.14 ポツダム宣言受託 8.15 戦争終結の詔書(ラジオ放送) 9.2 日本政府降伏調印  
以上